

Western Michigan University で
学ぶ青春のひと時
(Volume I)



WMU 文集編集委員会
2013年2月吉日発行

目次

I: WMU との交流はここが原点 (1962 年 6 月から 8 月)

- ① 永井昇氏： わが人生の幸運と旅の源流—青春時代の米国旅行
- ② 小林英雄氏： 我が若き日のアメリカと村上さん
- ③ 佐藤敬氏： カラマズーの思い出
- ④ 上谷達也氏： WMU の夏の思い出

II: 留学で学ぶ (留学年代順) (1956 年より)

- ① 長倉美恵子氏： My Reminiscence of Pre-historic WMU
- ② 田中榮治氏： From Texan to Michigander
- ③ 伊藤典子氏 (旧姓関根)： WMU 滞在記
- ④ 高村憲子氏 (旧姓神崎)： International House
- ⑤ 鈴木茂氏： 我が心の Western Michigan University
- ⑥ 伊藤伸一氏： 思い出という宝物
- ⑦ 白井美帆氏： Kalamazoo was such an eye-opener. Thank you, Kazoo!
- ⑧ 田中美恵氏(旧姓千谷)： Sarah との思い出
- ⑨ 阿部仁氏： カラマズーから始まったこと

III: WMU 百周年旅行 (2003 年)

- ① 上谷達也氏： WMU100 年祭

I. WMU との交流のルーツはここが原点 (1962年6月から8月)

- ① 永井昇氏： わが人生の幸運と旅の源流—青春時代の米国旅行
- ② 小林英雄氏： 我が若き日のアメリカと村上さん
- ③ 佐藤敬氏： カラマズーの思い出
- ④ 上谷達也氏： WMU の夏の思い出

I.① わが人生の幸運と旅の源流—青春時代の米国旅行

永井昇

昭和37年（1962年）慶応・WMU共催

アメリカ文化講座参加者

nnagai@u01.gate01.com

イタリアでは、「人生は、愛と歌と美食だ！」と言われているそうです。旅で幸せな人生を手に入れることが出来た筆者（定年退職シニア）としては、「愛と歌と美食」に加えて、「人生は、愛と歌と美食そして旅である」と言い直したい。

青春時代から社会人時代そして定年退職後のシニア時代と、筆者の人生は旅とともにありました。国内旅行では、北は北海道の知床から南は沖縄の与那国島まで多くの土地を訪れています。海外へは、大学三年（昭和37年、1963年）の夏の米国旅行（短期留学）を皮切りに、ほぼ毎年出かけてきました。結婚した時（昭和45年、1970年）から現在（平成24年、2012年7月）までに、夫婦二人あるいは家族三人（一人娘）で、29回の海外旅行（大半は個人旅行）を楽しんでいます。現代のようにLCC（格安航空会社）やインターネットもない時代から、このように多くの旅に出かけることができたのは、いくつかの幸運に恵まれたからです。

最大の幸運は、青春時代に米国に旅（短期留学）をしたことです。ちょうど半世紀前（1962年）の大学三年生の夏に、ウエスタンミシガン大学（ミシガン州カラマズー）と慶應義塾大学とで共催されたアメリカ文化講座に参加するために、太平洋とロッキー山脈を越えました。この米国旅行は、子供の頃から抱いていた、わが国にはない米国の豊かさや大自然への憧れを現実のものにするだけでなく、筆者の人生に数々の幸運をもたらしました。

米国では、航空輸送の隆盛ぶりを目にして、わが国の航空輸送産業の将来性を確信しました。大学を卒業したら、航空会社で働きたい気持ちが強まりました。東京オリンピックの年、1964年春に大学を卒業すると、念願かなって航空会社（全日本空輸）に就職し、社会人としての第一歩を踏み出すことができました。

この最初の異国への旅で、いつか米国へ留学したいと熱く思うようになりました。明るく親切な米国人の学生や先生。緑の芝生とレンガ造りの校舎がある美しく広大なキャンパス。

ホームステイ先の家族との交流。週末を利用して訪れたミシガン大学（ミシガン州アンアバー）で出会った親切な日本人留学生。この好青年から、留学への助言をいただき、そして留學生活の素晴らしさを知りました。この体験が、米國留學への熱い思いと、夢の実現へとつながりました。

全日本空輸を入社3年後に退職し、1967年（昭和42年）から二年間にわたり、コロンビア大学大学院（ニューヨーク）およびカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）大学院のビジネス・スクールへ留學しました。人類が月面に降りたたった年、1969年（昭和44年）に大学院を修了し、経営学修士（MBA）の学位を得ました。帰國後就職した米國系大手石油会社（モービル石油）では、生涯の伴侶となる女性と出会い、翌年に結婚しました。同年には、国際航空会社（日本航空）へ転職し、大学教員へ転身するまで29年間勤務しました。1998年（平成10年）に、五十代でビジネスマンから大学教授さらに大学院教授（東洋大学）に転身する際、この留學経験が大きな力となりました。なお、社会人から大学教授への転身の秘訣と対策を、『あなたも大学教授になれる 「知的自由人」のすすめ』（中央公論事業出版、2011年4月、電子書籍版 ディスカヴァー・トゥエンティワン、2012年6月）に取りまとめ出版しました。

ウエスタンミシガン大学での講座を終えると、長距離バス（グレーハウンド社）を乗り継いで、約一か月かけて米國大陸を東海岸から西海岸へと横断する旅をしました。90日間乗り放題で99ドル（当時の為替レート換算で約3万5千円）という割引運賃切符を利用しての節約旅行でした。東海岸のボストンをスタートに、ニューヨークなどを経てシカゴへ。そこから南下してミシシッピー川河口の港町、ニューオリンズへ。さらに、有名なルート66を一路西部へ。グランドキャニオンやロサンゼルスを経て、最終目的地、サンフランシスコに、夏が終わる頃に到着しました。1960年代に欧米で流行し始めたバックパッキング、節約旅行のスタイルです。移動には、運賃の安いバスを使い、泊る所はユースホステルやYMCAの安宿を利用しました。前年（1961年）に出版された小田実の旅行記（河出書房新社）のタイトルそのままに、「何でも見てやろう」と好奇心と冒険心を満たす、足のむくままに「歩く旅」でした。この米國大陸横断の貧乏旅行が、筆者の旅、特に異國への旅の源流と言えます。

ウエスタンミシガン大学、米國への旅は、このようにわが人生の幸運と旅の源流です。この価値ある機会を二十才の若者に与えて下さった、慶應義塾大学とウエスタンミシガン大学そして関係者の皆さんに深く感謝申し上げます。この米國への旅は、両親の深い愛情あってこそはじめて実現できました。あらためて、今は亡き父母にも衷心より「ありがとう」と言いたい。

添付写真

寄宿舍同室の村田修一くん(大学同クラスの友人)と仲良くした隣室の米国人学生。名前は覚えていませんが、二人ともニックネームはジェリー(Jerry)でした。写真は、寄宿舍と学生の愛車(シボレーのポンコツ)を背景に、左から村田修一くん、筆者(永井 昇)、赤毛のジェリーそして社会人学生のジェリーです。右端のオランダ系の社会人学生(高校教諭)のホランド(Holland)にある自宅に招待され一泊。結婚し、働きながら自分で建てたマイホームや手作りの池での魚養殖など、米国人の逞しさに驚嘆。また、社会人ながら大学で学ぶという生き方にも敬服。この写真は、忘れられない半世紀前の青春の思い出です。



I.② 我が若き日のアメリカと村上さん

小林 英雄

1962年6月～8月

koba78@v07.itscom.net

私のWMUは日吉から始まりました。大学二年の学年末試験の最中、クラスメートの友人と日吉の掲示板を見たところ、WMUの短期留学の募集が掲載されていました。当時は現在と違って外国に行くことは大変なことで、アメリカへ行きたいという思いが強く、友人と申込をしました。その友人は、クラスとクラブが同じで同行した中島勲君です。学校は、この計画は未だ実施は決定ではないが行なうよう努力しているとのことでした。4月から夜間、三田で英会話のレッスンが始まり、5月に実施が決まりました。

1962年6月22日に羽田空港で大勢の見送りを受け、タラップを上りBOAC機に乗り込みアメリカに飛び立ちました。途中で飛行機を乗り継ぎシカゴのオヘア国際空港に着き、バスでカラマズーに到着。まずは、アメリカ大陸の広さに驚かされました。

二人一部屋の寮に入り、キャフェテリアで好きなものを食べ、6週間にわたる夏季講座が始まりました。家庭訪問したり、ピクニックに行き久し振りに日本食を食べたり、またグレイファンドバスでシカゴに行き、ビールを飲みながらジャズの演奏を聴いたりしました。また、アメリカの学生とは夜の7時からソフトボールの試合をしたり（カラマズーは緯度が高く、7月初めは夜遅くまで明るい）、ゴルフをする人は、大学構内のコースでセルフでプレーをしていました。講座は、週4日で内容は英会話とアメリカ文明の講義でした。WMUは夏休みでしたが、アメリカの学生も学内にいて、食堂で一緒に食事をしたり、町で偶然に会ったりして交流を深めました。

こうして6週間の夏季講座が8月3日に終了し、後は、各自で各地を旅行して帰国することになっていました。私は、クラブの先輩の中根正紀さん、伊能（旧姓金子さん）祥子さん、そしてアメリカで亡くられた村上由希子さんと4人で、各地を旅行して9月下旬に帰国する予定で、出発前相談しコースの設定をしました。

カラマズーを出発し、直ぐにカナダのトロントに行きました。村上さんはフィギアスケートの選手で、以前レッスンを受けたコーチがトロントにおられるので来たのです。室内のスケートリンクに行き、靴を借りて私もジャンプなどはできませんが、普通に滑りました。暫く滑っていたら、私のところへ村上さんがずっと来られて、あの明るい笑顔で、「アラ、小林さん、上手ですね」と言われました。その時の村上さんの言われたことを今でも忘れることができません。

トロントからナイアガラの滝、バッファロー、ハーバード大学の校内でパンチを飲んだボストン、ニューヨーク、自由の鐘のあるフィラデルフィアを無事に経由してワシントンに着きました。ワシントンでは伊能さんのお陰で楽しい観光と美味しい食事を堪能しました。ここまで4人でとても楽しい旅行をしてきて、次の目的地はシカゴでした。ここで、女性たち2人はWMUの

あるカラマズーに行き、ホームステイ先の家庭を訪問してからシカゴに行くことになり、我々は中根さんと二人でニューヨークに戻り、数日後シカゴのアメリカ人の家で落ち合うことにしました。バスの出発は、女性たちの乗るバスの方が早かったので、我々はバスの出るの見送りました。そしてその数時間後、あの悲惨な事故が起き、村上由希子さんと悲しい悲しいお別れがあるとは誰が想像できたでしょうか。

我々はニューヨークでの滞在を終えシカゴに行き、待ち合わせのアメリカ人の家に電話して初めて事故のことを聞き、ただ驚くばかりで、到底信じることができませんでした。直ちに事故のあった現地に行き、いろいろな人に会ったり、いろいろなことを行い、数日があっという間に過ぎました。伊能さんは重傷で当分退院できないので、中根さんと私は二人で旅行を続けました。しかし、旅程を大幅に変更し、西海岸とホノルルだけを回り、予定より一ヶ月早い8月末に悲しい思いを胸に帰国しました。

昨年8月3日村上さんの五十回忌に参加させていただき、WMU へ一緒に行った方々と久しぶりにお目にかかれ大変に懐かしく旧交を温めました。妹さんの山本道子様のご案内状にも書かれてありますように、まさしく「五十回忌ですが、新たな出発をした五十回目の誕生日」です。このことは、五十回忌の5日後の朝日新聞の夕刊に写真入りで大きく掲載されていました。そして、村上さんと僅かばかりの期間でしたが、一緒に過ごした我々の心の中では、これからも村上さんは幾久しく存在していくことでしょう。

私は今から丁度50年前の21歳の時にWMU に行き、見るもの聞くことが新鮮で、日本にいては経験できないこともあり、視野を広く持つことの必要性を痛感させられました。そこで、社会に出てからは時間を見つけ、諸外国に出かけ異文化に接し、また日本とは異なる風俗習慣を知ることが出来、世界の広さを実感しました。特に若いときにこういう経験・体験をするのが良いと思います。また、アメリカでの事故に遭遇し、今まで元気だった人が急に亡くなるという経験から、人間の瞬先のことは分からないので、今の一時一時を大事にして悔いのないよう過ごそうと考えてきました。



右から伊能祥子さん 村上由希子さん 中根正紀さん 私（小林英雄）

I.③ カラマズーの思い出

佐藤 敬

滞在期間：1962年6月—8月

sweet343000-wmu@yahoo.co.jp

私は慶大工学部3年生の時に、慶大とWMUが初めて共催して開いたアメリカ文化講座へ64名の学生とともに参加するために今から50年前の1962年6月22日から8月4日までの6週間カラマズーに滞在した。

その時の思い出を当時の日記と資料のスクラップブックをひも解きながら綴ってみたい。

当時は未だ1ドル360円の時代であり外貨の持ち出しも制限されていたから今のように留学は盛んではなく、あまり大勢の学生が一度に出かけるのは世間の批判を浴びるのではないかということから、慶大三田キャンパスに集合して貸切バスで羽田空港へ向かい、家族は羽田空港への見送りは禁止するという指示があったことも懐かしい。

WMUでは男子学生はHoekje Hall、女子学生はFrench Hallにそれぞれ各部屋2人ずつに分かれて宿泊した。

WMUでは英語の語学講習のほか、アメリカ文化に関してWMUの教授陣によるさまざまな講義が行われた。私は出来るだけ毎回一つは質問するように心がけた。

1960年代のアメリカは未だ良き時代でカラマズーものんびりした良い街であり、住民は皆親切であった。当時は未だ日本人の留学生が少なかったこともあるが、たまたま数人で街を歩いていたところ住民に声を掛けられて中華料理店でご馳走になったり、街で偶然話を交わした黒人夫婦がそのまま家に連れて行ってきてサンドイッチを作って食べさせてくれたりした。

週末にはカラマズーの市民が我々を個別に招いてホームステイを経験させてくれ、私は7月のある週末に金曜日の夜から日曜日の夕方までRobert Casler氏の家に泊まり、週末は車でピクニックや色々なところに連れて行ってもらった。彼はカラマズーにある大きな製薬会社であるUpjohn社の社員で30歳くらい、WMU卒業生の奥さんと1歳半の男の子の3人暮らしであった。奥さんはアメリカ人に似合わず物静かな人で私が寮に戻る日にクッキーを焼いてお土産に持たせてくれた。その後、彼とはクリスマスカードを交換していたが、何年か後に日本支社の支社長として赴任してきたので日本で再会することが出来た。その後、彼は香港に転勤となって何年間か音信不通になってしまったが、私がUpjohn社に手紙を書いて消息を尋ねたところ、カラマズーに戻って別の場所に転居されたことが分かって文通を再開した。残念なことに2008年に奥さ

んが亡くなられ、彼は、今はミシガン州内の息子夫婦の家の近くのホルトと言う町で一人暮らしをしているが、東北大地震の時には心配してメールを呉れた。

ホームステイで宿泊を体験した日以外の週末も、別の学生のホームステイ先に一緒に呼ばれてパーティやピクニックに参加することもあった。ある日、そのような機会に、ホームステイに呼ばれていた同じ慶大生が「自分の父親が日本でライオンズクラブの会員でその紹介状を持ってきているのでカラマズーにいるライオンズクラブの人を誰か紹介してもらえないか？」とホームステイ先のご主人に頼んだことがあった。その人はあちらこちらに聞いたり、電話帳で調べたりしてくれたがなかなか見つからなかったのが私 “There must be a Lions Club in Kalama-Zoo!” と言うと大笑いになった。カラマズーという地名はネイティブ・アメリカンの言葉が起源だと聞いたが、地元の人には地名と Zoo（動物園）という語呂合わせは新鮮だったらしく、そのご主人はその後自分の友人に会うたびに「こいつがこんな面白い joke を言ったのだよ」と紹介するのはちょっと閉口したものである。

そういえば、最近たまたまカラマズーが歌詞に出てくる歌があることを知ったが、その歌は Kalamazoo と Zoo の語呂合わせをしている歌で、“I got a gal in Kalamazoo” という題名であった。

われわれの WMU でのセミナーは 8 月 3 日で終了し、当日の夜は Farewell Dinner が催された。私はカラマズーの市民になんとか感謝の言葉を伝えたいと思って、地元の新聞 Kalamazoo Gazette の投書欄に「WMU の教職員、学生はもちろんのこと、親切にして頂いたカラマズー市民に 65 人の学生を代表して感謝したい」という手紙を英文で投稿した。そこには「街で偶然会った人がご馳走してくれたこと」も触れたが、その文章の結びに「われわれは 6 週間のセミナーを終えて 8 月 4 日からはそれぞれ分かれて米国内を旅行して日本へ帰るが、行く先々で『どこから来たの?』と聞かれると思う。その時は『東京から』ではなく、『カラマズーから』と答えたい」と書いた。この文章は丁度セミナー最終日である 8 月 3 日の紙面に Japanese Student Would Say “I’m from Kalamazoo” という表題で掲載され、(下の写真参照) その日の夜の Farewell Dinner の際に当日の新聞で既にその記事を読んでいた何人かの大学関係者から逆に感謝された。パーティが終わって Hoekje Hall の部屋に最後の夜を過ごすために戻ると、電話があったと言う伝言メモがあって「新聞を読んだ。明日からの旅行の安全を祈る」と書いてあり、そこにはサンドイッチをご馳走してくれた黒人夫婦の名前があった。

KALAMAZOO GAZETTE

Michigan's Oldest Newspaper
Established 1833. Published Daily and Sunday
Friday, August 3, 1962.

VOICE OF THE PEOPLE

Japanese Student Would Say 'I'm from Kalamazoo'

To the Editor:

Thanks to Kalamazoo citizens.
I am one of the Japanese students who are visiting Western Michigan University. We, 65 Japanese students from Keio University, Tokyo, will finish a six-weeks session at Western Friday, and we will be leaving Kalamazoo on Aug. 4 to make our round trip throughout this country.

Thanks to you Kalamazoo

our treasurer, Mrs. Ronald Onderlinde, 2791 Summerdale.

Mr. Pratt asked me when the Christian Foundation for Handi-

This column is for discussion of issues and/or conditions not personalities. Contributions must be signed and bear the writer's full name and address which will be published. Letters exceeding 300 words are subject to condensation. The editor reserves the right to reject any contribution.

翌 8 月 4 日からはそれぞれ数人ずつに分かれて米国内を旅行して日本に戻った。私は当時工学部の一年先輩で、この文集の編集委員長でもある上谷達也氏と二人でグレイハウンドバスの「99 日間 99 ドル」と言うチケットを使って東海岸から西海岸まで旅行して 9 月 1 日に帰国した。

帰国直前にサンフランシスコの立ち寄り先で私の親から来ていた航空便で、一緒にセミナーに参加していた村上由希子さんがクリーブランドでグレイハウンドバスの交通事故で亡くなったと言う衝撃的なニュースを知らされた。

彼女を追悼するスカラシップが作られてその後 50 年も続いているということは誰からも愛された彼女の人の柄によるところが大きいですが、WMU 関係者を含むカラマズーの人たちの優しさと親切さがあってのことであると今更のように思えてならない。

当時は映画かテレビのホームドラマでしか知らなかったアメリカの様子を肌で知り、アメリカ人といろいろと話をしたという経験はその後の私に大きな影響を与えた。外国の人と付き合うにはただ英会話できるだけでなく、日本の文化や歴史、政治などについての教養を深めておく必要があることも実感した。WMUでの夏季留学から帰国した翌々年の1964年には東京オリンピックが開かれたが、私は帰国してすぐ英会話や日本の歴史・地理を勉強しなおして英語ガイド(通訳案内業)の国家試験を受けて合格し、その後の4年生および大学院の学生時代にはアルバイトで通訳の仕事をした。

私はその後企業や大学で研究開発の仕事に従事するようになってから、国際会議や技術調査で何回か単身で海外出張する機会があった。アメリカで開かれる学会で、英語で論文発表や討論を行ったり、論文で名前を知っているだけで見ず知らずの企業や大学の研究者に手紙を書いて面会を申し込み、列車やバスを乗り継いで会いに行ったりすることができたのも学生時代に短期間ながらアメリカでの生活を経験したことが大きな自信となっていたために違いない。

アメリカには何回も出張したが、シカゴやクリーブランドへまでは行くことがあったものの、カラマズーはついに再訪するチャンスがなかったし、おそらくこれからもないだろう。歌の題ではないが、まさに”Kalamazoo on My Mind” 「わが心のカラマズー」というところである。

I.④WMU の夏の思い出

上谷達也

1962 年サマーセッション参加

uyetani@f8.dion.ne.jp

それは、今を去る 50 年前であった。大学 3 年が終わろうとしていたときであったと思うが、WMU のサマーセッションを募集していることが分かり、それに応募した。運よく合格して、はやる心を抑えながら、準備をしたことを覚えている。羽田から、プロペラ機でハワイ、ロスアンジェルス、シカゴを経由して、まだ見ぬ土地カラマズーに大型バスで移動した。それにしても、飛行機の窓から見たロスアンジェルスの光り輝く地上を見て、まさにアメリカの国力を感じた。これが猛烈な印象として今でも残っている。

広大な土地に、学校 WMU があり、我々は、学生が夏休みのときの寄宿舎を利用して、ここに宿泊して、6 週間の英語やアメリカ文化を中心とした授業を受けた。正式なセミナーの名前は、Seminar on American Civilization である。その当時のノートには、On American Civilization と English Conversation の 2 冊が手元に残っている。きれいなメモではないが、6 月 22 日出発から、8 月 4 日まで、毎日朝は早く 7:20~9:10、9:40~11:30、13:10~15:00、15:30~17:10 の時間割があり、色々なことを勉強した。午前中は、どちらかという、視聴覚で音楽を聴き、映画などを見て、耳を慣らすということに力点が置かれていたようである。言っていることが分からなくとも、目で見て、耳で聞き何となく理解を進める狙いがあったと思われる。それに大変多くの先生から、それぞれのサブジェクトで、講義を受けていた。アメリカの歴史、地理、政府のことなどなど。当然のことながら、ヒアリング力が乏しいことから、一つのコースで、2~3 ページの記録が残っているにすぎない。文脈を読み取ろうとしても、難しいものがある。

しかし授業の時間の多くは、Robert Palmatier 先生の英語発音の練習に割かれていた。ここで、発音の基礎を学んだといえる。これが、社会人になり、海外との仕事のやり取りのときに大変役に立った。耳がその発音をキャッチできるかどうか、また発音が r と l の区別など、我々日本人にとって大きな課題である。その一端が、このノートを見ていて、思い出すことができた。なんでも若いうちに鍛えることが重要と感じた。

食事は、大学のカフェテリアで取った。日本で食べるものとは大きく異なり、肉とマッシュポテトというアメリカンスタイルが多かった。でも、そのボリュームを楽しんだが、味付けがいまだしということ、何となく飽きてきたような記憶がある。

校舎から町に出るには、坂道を下って買い物などにも行った。途中にアイスクリーム屋があり、そのうまさと濃厚さには、本当に舌を巻いたものである。すごい楽しみであった。だれしもが、その恩恵に預かっていたと思われる。

授業のほかのアクティビティとしては、ランシングにミシガン州知事を訪ねたほか、Yellow Cab（アメリカのタクシー）の生産工場。Up Johnes の製薬会社などであった。Detroit の川岸にある Lando's の遊園地などへも出かけた。

学校側では、ホストファミリーをそれぞれつけてくださり、家庭訪問をして子供と遊び、ご馳走になった。十分できない我々を温かく迎えてくださったことは、素晴らしいおもてなしであった。

我々を色々な意味でサポートしてくださったのは、もちろん学校であるが、カラマズーで牧師をされていた望月夫妻が、機会あるたびに、我々を献身的にサポートしてくださったのは、頭の下がることであった。言葉のニュアンスなども時には、長年住んでみないと分からないことなども、笑い話をまじえ、教えてくださった。



100年祭にご出席のお元気な望月牧師

真夏のミシガンは、本当に過ごしやすく、あっという間の期間であった。終わってからは、後輩の佐藤君と二人で、全米を\$99で回れることができる周遊のグレイハンドバスに乗って、東は、ニューヨークから、西は、サンフランシスコまで、旅をした。それぞれの家庭の知

人を頼って、宿泊をして回った。グレイハンドバスは、時刻表がしっかりしており、それを頼りに旅行をした。アメリカという理解も、結構このバス旅行で進んだといえる。この当時のアメリカは、ある意味で安全な社会であり、それほど恐さもなく、野次喜多道中であった。

カラマズーを出てからの道程は、デトロイト、オハイオ州のコロンバス、シカゴに戻り、ナイアガラの滝、ボストン、ニューヨーク、ワシントンでポトマック川の桜並木を見、ピッツバーグ、シンシナティ、シカゴ、デンバー、ソートレーク、さらに万博が開かれていたシアトルへ行き、スペースニュードルタワーに数時間待ちで昇って、景色を見た。その時の景色の素晴らしさは、何とも言えないものであった。森と湖、海が調和しており広大な国土がうらやましく思った。さらにロスアンジェルスへ下り、ハワイを経由して日本へ帰国。約 1 カ月の旅行であり、よくこれだけ回ったものと自分ながら感心した。色々な人のお世話になりながらの旅は、大変心地よいものであった。

本当にこれぞ、アメリカというものを見た素晴らしい機会であった。50 年前の記憶は必ずしも十分ではないことが悔やまれる。

本当に青春の一ページであったと同時に、社会人になってからも、この短い期間の訪問であったが、大変役に立ったといえる。

以上

II : 留学で学ぶ（留学年代順）（1956年より）

- ① 長倉美恵子氏 : My Reminiscence of Pre-historic WMU
- ② 田中榮治氏 : From Texan to Michigander
- ③ 伊藤典子氏〈旧姓関根〉 : WMU 滞在記
- ④ 高村憲子氏（旧姓神崎） : International House
- ⑤ 鈴木茂氏 : 我が心の Western Michigan University
- ⑥ 伊藤伸一氏 : 思い出という宝物
- ⑦ 白井美帆氏 : Kalamazoo was such an eye-opener. Thank you, Kazoo!
- ⑧ 田中美恵氏(旧姓千谷) : Sarah との思い出
- ⑨ 阿部仁氏 : カラマズーから始まったこと

II.① *My Reminiscence of Pre-historic WMU*

長倉（旧姓阿部）美恵子
1956年9月~1958年2月
nagakuramieko@ybb.ne.jp

本文は日本語なのにタイトルを英文にしたのには理由がある。それはPre-historic という言葉を使いたかったからだ。

今年でWMUと日本の大学との交流が50周年を迎えるというが、私は今から56年前にフルブライト交換留学生としてWMUに留学した。修士課程に入学した1956年9月に大学はWestern Michigan College of Educationから丁度、複数学部を持つWestern Michigan Collegeとなった。そして翌1958年には総合大学のWestern Michigan Universityとなり、私はUniversity第1回卒業生として2月1日にMaster of Arts を取得した。

だから、私にとってWMU留学はUniversityになる以前、さらには日本の大学との交流50周年以前という二重の意味でPre-historic なのだ。

先ず、何故WMUに留学するようになったかを紹介しよう。今思うと、いくつもの幸運に恵まれたためである。

私が4年制大学の英文科を卒業した1955年は「もはや戦後ではない」と云われ始め、我が国は急速に復興を遂げつつあったが、大学卒業生の就職は厳しい大氷河期だった。当時の文系学生にとって花形職業である全国紙の記者などは、1名の募集に500名以上が入社試験を受ける。大学や恩師達に相談すれば、就職なぞせずに早く結婚相手を探せといわれた。だが、4大卒の女子にとって「婚活」は「就活」以上に厳しかった。女子は高校や短大卒でなければ書類選考つまり履歴書交換の時点で拒否され、お見合いが実現することは難しかったのである。

そこで切羽つまり、大学の掲示板に出ていたフルブライト交換留学生に大学3年終了時に応募した。「何故、留学は米国の大学でなければならないのか？」という面接試問にうまく答えられず不合格。すると友人の一人が「アメリカ文学や英文学の専攻は競争激甚だが、日本では珍しい図書館学専攻というのは易しいらしいよ」と助言してくれた。

大学では結構図書館を利用していたものの図書館学専攻とは何だかさっぱりわからず、よく欧文タイプライターを使わせてもらったCIE図書館(GHQ/SCAPの一部、民間情報教育局)に訊ねると、当時、東京の上野公園内にあった日本図書館協会を紹介してくれた。

フラフラと飛び込んだ女子学生に協会の事務局長はとても親切に対応してくれ、日本には図書館学を教える所として文部省図書館職員養成所と慶應義塾大学文学部の日本図書館学校(現図書館・情報学専攻)の二つがあること教えてくれた。さらに米国留学を目標とする私には慶応の図書館学校の方が適切だろうと推薦状まで書いて下さったのである。その事務局長は故有山崧氏で、

後に東京都日野市長として我が国初の公共図書館サービスモデル地区を実現された方である。

こうして、推薦状のおかげで私はほぼ無試験同様に慶應義塾大学文学部日本図書館学校に入学できた。その頃、図書館学校の教師陣はほとんどが米国図書館協会から派遣された米国人で、講義はすべて英語で通訳付き、シラバスも英文であった。ただ、徹底した米国式の教育で毎日毎日大量の宿題（assignments）が課せられ、睡眠不足が日常化していた。現在はおもかく、日本図書館学校時代の慶応図書館学科は大量の宿題ゆえに、その頃と同窓会誌のタイトルは『アサインメント』であったほどである。

フルブライト交換留学生は当時2種類あった。往復旅費と生活費が支給されるAll Grant と往復旅費だけのTravel Grant である。後者は米国の大学から一定額以上の奨学金が支給されるなら、ほとんど合格することになっていた。慶応の図書館学校に通いながら、私はせっせと米国の色々な大学に奨学金を求める陳情の手紙を何十通も送り続けたが、全く反応はない。ある日ふと思いついて、2年ほど前に日本に視察にこられた国際レクリエーション協会事務局長T. E. Rivers 氏に手紙を書いてみた。私はRivers 氏夫妻が日光にいらっしやった際に父のアシスタントとして通訳をしたのである。

「瓢箪から駒」とはまさにこのことだろうか。Rivers 氏は早速、シカゴのRosary CollegeとWestern Michigan College の修士課程奨学金を確保してくださった。Rosary Collegeの方が多少金額は多く、シカゴにあるのも魅力的だった。だが、Rosary College は当時カトリックの女子大学で、必ず寮に住み込むことが条件だった。Western Michigan はカラマズーという耳にしたこともない田舎町にあるものの、元来は州立の教員養成系の男女共学大学である。迷った末、私はWestern Michigan を選んだ。

Western Michiganは修士を獲得することを条件に、毎年10名のGraduate Fellow（院生助手）を選任していた。Fellowは所属する学部や学科で週15時間勤務が義務付けられるが、その報酬として年\$750が支給される。1956-57学年度には、10名中3名が海外からのフルブライト交換留学生であった。デンマークの小学校教員、英国オックスフォードからのspeech correctionist（発音矯正士）、それに図書館学専攻の私である。

一言ここで述べておきたいことがある。それは、何故、交換留学生や米国の大学奨学金にこだわったかである。私と同年輩の方達なら理解できるだろうが、当時は我が国の外貨保有額が少なく、また日本円は国際通貨でもなかったから、一般人は簡単に円をドルに替えることができなかった。さらに当時の固定為替相場は1ドルが360円で、大卒の初任給が月2万円前後だったから、余程の大金持ちでもなければ自費留学は不可能だったのだ。

忘れもしない1956年8月30日、遂に私は小雨降る横浜大棧橋から氷川丸で出航、9月11日午前7時にシアトル港に着いた。当時は未だ太平洋横断の民間航空機は就航しておらず、米国への渡航は船に乗らざるを得なかったのだ。日本からのフルブライト交換研究者及び留学生全員は、

第二次世界大戦中に病院船であったが故に撃沈されずに唯一我が国に残された客船氷川丸に乗って、船酔いに散々苦しめられつつ海をわたった。

シアトルでは既に帰国されていた慶応図書館学校の恩師でUniversity of Washington の児童及び学校図書館学専門准教授Miss Mebel Turner のお宅に一泊させていただいた後、いよいよ中西部や東部の大学に向かう研究者や留学生達と一緒に、9月12日夜、大陸横断鉄道に乗ってカラマズーに向い出発した。

車中で二昼夜を過ごし、9月15日午後、とうとうカラマズーに到着した。その日の日記を下に転記してみよう。

”寝ようとしたが昨夜はとうとう一睡も出来なかった。朝、黒人のボーイが起こしに来た。とても興奮しているので吐き気が止まらない。ランチは平山さんがおごってくれたが、カラマズーに着くまでに全部もどしてしまった。

汽車の駅には図書館学科主任教授のルフェーブ先生 (Miss Alice Louise Le Fevre) と Foreign Student Adviserのビーラーさん (Mrs. Isabel Beeler) が迎えにきていた。ルフェーブ先生という人はせむしだが、私は好きになれそうだ。ビーラーさんはいささかコールド (冷たい) である。

夜、29才になるというフランス娘で今メキシコの図書館員をしている人と一緒にビーラーさんの家に泊めてもらう。果たして彼女のように上手に英語をしゃべれるようになるだろうか。アダプト (適応) できて、楽しく一年間を暮らせるだろうか。

カラマズーは大体栃木県の烏山町位の小さな町である。しかし学校、大学、その他の設備のよいことには驚くばかりである。シアトルよりは非常に上品であって、なにかしつとりとした日本人にもなじめるような気のするところだ。”

多分、私は第二次世界大戦後初めてのWestern Michiganでの日本人留学生である。勿論、大学には当時流行のPhysical Therapy専攻があったため、遠くハワイやカリフォルニアからの日系学生が沢山在籍していたが、日本国籍を持つ日本人は私が最初ではなかったかと思う。

そのためになかなか愉快的なことがあった。例えば、町で一才した買い物をする、翌日にはそれが学内中に知れ渡ってしまい、学生食堂で見ず知らずの女子学生から「貴女、今履いている赤い靴、それ昨日、ダウンタウンの靴屋で、2ドル99セントで買ったのでしょうか。よく似合うわよ」と話かけられる。

また、日曜日になると、メソジスト、バプティスト、プレスビテリアン、カトリックと色々な宗派の教会に行かないかと誘われる。キリスト教にも宗派があるのは知っていたが、非キリスト教徒の私にはその違いは判らない。そこで次々と異なる宗派の教会を訪れたが、最終的には夕食会のある教会に決めた。それは当時入っていた学生寮に土、日の夕食が無く、また大学内の食堂も休業だったからである。当時、堅実な中西部の地方大学寮生はほとんどが週末には帰宅し、家族全員が揃って日曜礼拝に行き、早めの夕食を皆で楽しんで、夜遅く寮に戻ってくる。帰宅しない寮生は、予めパンなどを買ってしておくか、異性パートナーと一緒にダウンタウンのホテル内レス

トランで値の張るディナーをとるしかなかった。無論、ハンバーガー屋のマクドナルドなどは未だ出現していない。

Western Michiganは私が在籍した1年半の間に急激に拡大した。1956年秋に入学した頃、授業はほとんどがEast Campus と呼ばれる町に近い小高い丘の上の古風な校舎で行われていた。だが、翌年には郊外の広い敷地にWest Campus と呼ばれる多くの新しいビルが次々と建てられ、大学の本部などもここに移動し、講義もそちらのキャンパスで開講されるものが増えていった。この拡張は激増する学生数に対応するためであったろう。当時、米国では兵役で海外にいった若者達が続々と帰国し、州立であったWestern Michiganは希望すれば彼等を必ず学生として受け入れなければならなかった。米国では一定期間兵役にいくと、大学教育を無償で受けられたのである。

East Campus とWest Campus との間にはスクールバスが運行されていたが、その本数は非常に限られており、ほとんどの学生が自分の車で移動していた。車では数分の距離だが、歩くと早足でも20分以上は掛かる。適当な時刻のバスがないと、講義に遅刻してしまうことも度々だった。講義間のキャンパス移動には皆急いでいるので、滅多にRideしてくれる者はなく、車をもてぬ悲哀を味わった。

Western Michiganでは最初の一学期、East Campusにある女子学生寮のSpindler Hallに住んでいた。Graduate Fellow として課せられた週15時間の仕事はEast CampusにあるCampus School（教育学部付属小・中・高校）の学校図書館の助手であったし、図書館学科研究室もEast Campusの古い図書館内にあったから、Spindler Hallは大変便利だった。ダウンタウンにも歩いて行けるのが一番のメリットであった。

だが、所詮Spindler Hallは学部学生用の寮で、院生用ではない。最初は若返った気分で寮の友達とアメフトやバスケットの対校試合にカウベル(cow bell)を鳴らし、声を限りに応援したり、男子寮学生の襲撃に部屋に籠もって奇声をあげて抵抗したりして楽しんだ。だが、だんだんと嫌気がさしてきた。特に夜、シャワーを浴びたあとで女性ばかりであるのをいいことに、寮生達が一糸纏わぬすっぴんで廊下を走り回り、笑い転げるなどはどうしても我慢ならなかった。

やがて、親しくしていた図書館学科の友人ミルドレッドが卒業することになり、彼女が住んでいた下宿に2学期から移ることにした。ここはEast Campus から真っ直ぐに急な坂の石段を下ったWest Lovell Street にあり、家主さんはMr. & Mrs. Bert Corsette である。二階に三室があり、各室をそれぞれWestern Michiganの院生女子に貸している。私はここで、どちらも教育学専攻で小学校教員を目指す二人の生粋ミシガン子の白人と暮らすことになった。二階には専用の台所、お風呂場もある。ルームメートの二人は大変に大人で、年若い私の人生相談にのってくれたり、アメリカ特有の習慣について助言してくれたり、町で衣類のバーゲンがあると誘ってくれたりした。

Corsetteさん夫妻は、まるで孫娘のように私の世話をやいてくれた。週末にルームメートの二人が家に帰ると、必ず夕食に誘ってくれる。私が気を遣わないようにとMrs. Corsette は必ず「貴

女にお皿を洗ってもらう代わりに夕食をおごるのよ」と云ってくれた。ご馳走は大抵が七面鳥の丸焼きである。七面鳥は鶏よりも安いし、七面鳥は大きくて二人では食べきれないせいかもしれないと思いつつも、家族の一員のような気持ちで週末の夕食ができるのが嬉しかった。寮で買い置きのパンと牛乳を一人でボソボソと食べていたことを思えば夢のようである。

Mr. Corsette は私に一階の居間にあるテレビをいつでも自由に見ていいとってくれた。当時はアメリカでもテレビは未だ高価で大抵一家に一台、学生個人には手の届かないものだった。Corsetteさん夫妻、あるいはMr. Corsette と夕食後や週末に評判のルーシーショウ、エド・サリバンショウ、年末のライスボールを存分に楽しんだ。判らない英語もようやく聞き取れるようになってきたが、聞き取れなかったことや理解できないことは易しい言葉でCorsetteさん夫妻が説明してくれた。Corsetteさん夫妻に留守番頼まれた日には、何時間も一人でテレビの好きな番組を鑑賞した。

Corsetteさん夫妻には一人息子のBert Jr.がいる。彼は占領軍の兵士として日本に進駐していた大変な親日家。両親に常々「大変に日本では親切にしてもらった」と話し、「あんな好い国はない」と褒めるのだそうだ。ひょっとしたら私への親切は一人息子を大切にしてくれた日本へのお返しだったのかも知れない。

さて、冬は寒いだろうと毛布を貸してくれ、授業中にヒアリングに疲れて眠ってしまっても優しく後でそっと講義内容のメモをくれたルフェーブル先生、オーバーを買うお金のない私に古着の綿入れオーバーを探してきてくれ、小柄なサイズに自らミシンを踏んで仕立て直してくれたビーラーさん、友人のミルドレッド、ダイアナ、ジョアン、下宿の家主Corsetteさん夫妻、その息子Bert Jr.と奥さんのユーン、何の役にも立たない助手の私を手取り足取り、ゆっくりと図書館の実務を教えてくれたCampus Schoolの司書教諭パターソン夫人、週末にインド人の学友ディナと一緒に家に招いてくれ、米国料理の手ほどきをしてくれたヘリック夫人、その夫でWestern Michiganの先輩である優秀なセールスマンのヘリック氏、長期のお休みにはわざわざ車で迎えに来て農村生活を体験させてくれ、ミシガンの名所を車で案内してくれたカラマズー郊外リッチランドの農場主テルファーさん、それから、それからと私のカラマズーの生活を支え、助けてくれた人々のことを書けばきりが無い。

後にニューヨークに移って感じた人種差別をカラマズーではほとんど感じることはなかった。それは留学生という「お客さん」だったせいかもしれない。それでも、カラマズーの人達、Western Michiganの人々は五〇余年後でも私にほのぼのとした思い出を与えてくれる。

有り難う My WMU! 有り難うカラマズー!

II.② From Texan to Michigander

田中榮治

1965年8月－1966年8月 大学院留学

edutnk@aol.com

Fulbright Scholarship

1963年11月23日は勤労感謝の日だった。朝起きて FEN (Far East Network) のニュースを聞こうとしたら、静かな音楽しか流れていない。暫らくしたら「ケネディー大統領がダラスで暗殺された。」と。

この年、フルブライト留学生試験で落ちたが、「Listening の点数が少し足りなかったので来年挑戦しなさい。」と言うご丁寧な書状を委員会から頂き、それに備えて東京四谷の日米会話学院に月曜日から金曜日まで毎日、午後6時から9時まで週15時間、仕事を終えてから通学した。75%以上の出席を要するので8時まで残業した時は丸の内からタクシーで駆けつけた。

ゼミがマルクス経済学だったので米国留学は困難と思い、近代経済学（国際経済）のゼミの教授に頼んで卒業後1年間、夜間授業に通った。英会話の勉強はその後になった。

1964年、朝霞の米軍基地内で TOEFL の試験を受けて第1関門通過。卒業証明書、成績証明書、英語小論文、教授2人（マル経と近経）の推薦状を提出して第2関門の書類選考を通過。第3関門は日米10人位の経済学教授による面接試験。「ロストウ教授がいる MIT に行きたい。」と言ったら、鍛冶元朗東大教授が「彼は別の大学に移ったよ。」と。「兎に角、米国に留学したいので、大学はお任せします。」と回答。世界各国からの留学生は当然 Ivy League を希望するが米国は学生を全土に分散させたいはず。幸い「経済学部門で6人の全額給費生」に選ばれた。学会（京大、香川大）、行政（通産省、日銀）、民間（住友化学、東京海上）の3部門各2名の枠だったらしい。

留学前研修

直ぐに米国大使館職員宅で毎週1回のマナー・会話の留学前研修が始まった。私は、司法修習所長、東京大学講師、時事通信記者の方々と麹町に住む技官の家に通った。飯田橋駅から歩く。東西線は未だなかった。1965年の春から自主的に上智大学国際学部でサミュエルソンの「経済学」を勉強した。入学試験は「北ベトナムの魚雷艇がトンキン湾で米軍艦を攻撃したので報復の為に北ベトナム爆撃を開始した。」と言う FEN 記事の書取り。（40年後に、当時の国防長官だったマクナマラが「北爆を開始する為の作り話だった。」と告白。）米軍人や、アフリカ諸国の大使館員等も多数受講。授業では、不況期だが「株式3百万円を購入」させられ大損。

出発前に六本木の国際会館でフルブライト委員会、半蔵門の東条会館でライシャワー米国大使の送別会があった。ベトナム反戦デモ隊に阻まれて遅れて来られた大使が「米国でベトナム戦争

について意見を聞かれたら、自分の意見を言って欲しい。」と言われた。

University of Texas, Austin

1ヶ月間の留学前研修は米国で行われる。秘かに希望していたハワイ大学でなくテキサス大学へ行けとの通知。1960年の留学生は横浜港から **President Line** で渡米。その後は航空機に切替えられた。1965年8月1日、羽田空港発ホノルル行きは **Pan American**。ハワイ観光後、夕方のサンフランシスコ行きは **United**。ダラス迄の夜行便は **American**。オースティン迄は **Braniff**。政府留学資金なので航空会社も4社に割振り。持出し外貨は\$500（換算率¥360の固定相場で18万円）の時代だった。

TOEFLの試験でクラス分け。Aクラスの殆どが日本人と韓国人。遊ぶことなく真面目に勉強し、極めて植物的。それに反し、ギリシャ人のルームメイトは、良く喋る南米留学生同様Cクラスだが、良く遊び廻り動物的。大統領が送別会を開いて送りだしてくれたというペルー人も「研修期間は楽しむ。」と。観光も組込まれていて、ロデオ見物、ジョンソン空軍基地見学（B52に触れる）、ヒューストンの金持宅に分宿し港湾見学。次はアラモ砦見学と言う時に（メキシコ人留学生は行きたくないと言っていた。）、WMUから受講科目登録が始まるので直ぐ来いと呼び出し。

テキサス大学は、所有地から石油が出て財政が豊かなので学生寮は綺麗で、リンネンサービスはメイドがしてくれた。帰国前の1966年8月1日、テキサス大学大学院のある塔の上からベトナム帰りの元海兵隊員が近辺の通行人を日本製双眼鏡付銃で狙撃し23人が殺された。1年前、私達研修生は射程距離内を歩き回っていたのだ。日本は明治維新に銃刀を取上げたが、米国は未だに「護身の為」と称して銃所有は野放し状態で大量殺人事件継続中。

Western Michigan University, Kalamazoo

シカゴからミシガン湖越えの飛行機は双発のプロペラ機。カラマズーのホストファミリーの大邸宅は後にNYのWorld Trade Centerを軽量建材設計したDetroit在住の山崎建築士設計。清水寺を模したという回廊があった。3台の自家用車はリンカーン、サンダーバード、フォルクスワーゲン。Sound of Silenceの曲とPeter, Paul and Maryが流行していた。

「登録の時に風呂敷包みを持っていたので日本人と分かった。」と日本女子大から留学して来ていた中曽根美智子さん（首相のご長女）から言われた。フルブライトの留学期間は1年。B以下だと落第点なので懸命に勉強した。毎週末、中曽根さん、日本大学経済学部教授になられた関根さん、村上奨学生の高橋朋代さん達とカフェテリアのボーリング場で\$1の靴を借り、腕を磨いた。中曽根さんのお父上が来られ夕食に招かれた時、試験直前で行けず残念だった。

「読み書き算盤」と言うが、算盤が役に立った。当時は、算盤、計算尺、タイガー手回し計算機の時代。レミントン電動計算機は東京海上火災の経理部に1台しかなかった。アクレイホールの部屋で引越荷物を開けた時に算盤が出てきた。「これは何か？」と聞かれ、1桁、2桁の加算をさせられた。加減乗除の桁数が少なかったので算盤を使わず暗算で答えを出した。

生まれて初めて「多桁の暗算」を知りルームメイト達は驚愕し仲間を前に実演させられた。

全額給費留学生として WMU に行ったのは、ミシガンのロータリークラブ資金が付いていたからのようで、15 か所のロータリークラブで「日本について」講演させられた。「算盤と暗算が出来る日本人」と言う事が伝わっていたので、何処に言っても 10 人の会員が 3 桁の数字を読上げ、私が壇上で答を言うはめになった。地方新聞に”Mental Feats Amazed Rotarians”等と書かれ、WMU のピーラー外国部長からお誉めの言葉を頂いた。幾つかの小中高校からも呼ばれ、暗算の実演をさせられた。芭蕉の俳句の解説をさせられたこともあった。

マイロン・ロス、ジャンカー教授達の授業も熱心に聴いたが、他大学の教授を招いた特別授業で、後にノーベル賞を受賞されたシカゴ大のミルトン・フリードマン、「金とドル危機」で有名だったエール大のロバート・トリフィン、教育経済学のシュルツ、ボールディング教授達の講義を聴くことができた。

国際フェスティバルで、日本の地図上、沖縄が”No Flag”と表示されていたので、沖縄からの留学生が”We are Japanese.”と言って怒っていた。当時、日本人は身分証明書なしでは米国占領下の沖縄に渡航できなかった。そういえば、中国本土からの留学生は皆無で、中国人は台湾人、香港人だった。独逸の留学生も西ドイツからだった。

夏休みに日本から英語教師達が研修に来たが、英会話が苦手なようだった。そう言えばライシャワー大使も、「臆面なく喋りなさい、英文学の教授と、英語教師達は完璧に話さないと恥だと思ふあまり、英語を話さないのでは話が上達しない。」と言われた。

週末にミシガン湖畔にある友人宅のトレーラーに泊めてもらい、ミシガン湖畔の Sand-dune で読書したり、泳いだり。Holland ヘチューリップを見に行き、Kellogg, Up John を見学し、ルームメイトのデトロイト宅に泊まってフォードの工場を見学。コークスを燃やして鉄を溶かしマスタング・ファルコンを造るのを見て感動。当時有名だった「コボホールの自動車ショー」にはトヨタのピックアップ 1 台しか出ていなかった。ルームメイトは年俸\$5,500 でクライスラーに就職した(学校の先生は\$4,000)。彼の父親は GM 勤務で「トヨタから研修生が 1 人来ている。」と言っていた。カラマズーに日本料理店はなく、ホストファミリーが時々 Dragon Inn で中華料理をご馳走してくれた。

寮が閉鎖されるクリスマス休暇は、Climax と Barr Oak のロータリアン宅に泊めてもらい、汽車でデトロイトからカナダ経由でバッファローへ。ナイアガラの滝の飛沫で岸辺の街灯や樹木が氷結して純白の冬景色。夜汽車で Blackout 直後のニューヨーク Grand Central 駅へ。World Trade Center は未だなく Empire State Bldg.及び自由の女神の冠まで登る。Penn Station から 5 時間、ワシントンへ行き、ケネディーの墓(現在の墓になる前)で黙祷。

1966 年の早春、ゼミの友人の車でミシガン州を北上、スペリオール湖を訪ね、バスでミルウォーキー、シカゴ経由でカラマズーへ戻る。経済学部長から「Summer Session で頑張れば Master が取れる」と言われ、本社人事部長に事情を説明し「1 年を少し超える事」を特認してもらう。その後再び学部長から、「奨学金は確保するから博士課程に進め」と言われたが、休職期間の 2 年延長は無理なので断念。授業終了は 8 月 12 日、翌日の卒業式は快晴で、修士用の

ガウンと帽子を借りて出席。その頃、MBAは流行前、予見できていたらMBAを狙ったのにと今にして思う。(昨年から早稲田大学オープンカレッジの夜学でAdvanced Business Readings and Discussionを受講し、50年遅れでMBAの勉強を始めた。)

Commencement in August

フットボール場での式典では卒業生各人が登壇し、学長からダミーの白紙卒業証書(立派な卒業証書は1ヶ月以上後に郵送されて来た)を受け取った。その翌日、望月牧師達に見送られ、カラマズー駅から帰国の途に。シカゴで別の路線の始発駅からロス行きのZepherに乗車。驚いたことに1等車のコンパートメント。車掌がベッドメイキングに来る。ミシシッピー川を渡り、トウモロコシ畑の中を走り続け、デンバーでロッキー山脈を見る為に途中下車。

その後、「必ず見て来い」と上司に言われたグランドキャニオンに寄りロスへ。駐在員宅に泊めてもらいディズニールランドへ。ここでも「社員は計算機、私は暗算」で計算の実演。グレイハウンドでサンフランシスコ。ここまで陸地で来たのは、1966年(Beatlesが日本公演をした年)、日本で3連続航空機事故があったから。先ず、札幌の雪祭りから帰った全日空機が羽田沖に墜落、次いでカナダ航空の飛行機が羽田着陸時、岸壁に車輪を引掛け大破。さらに、羽田発の英国航空機が富士山上空で爆発。多くの学友達が「太平洋岸までは陸路」を推奨。

After Graduation

帰国後は、サンパウロ駐在(1975-1981年)でポルトガル語、メキシコ駐在(1987-1990年)でスペイン語、日本進出のドイツ企業で独逸語を覚えたが、20カ国への出張時は何時も英語。2003年のWMUのCentennial記念では慶応大学の村上奨学基金関係者を中心に団体旅行を企画。卒業後37年振りでの“Sentimental Journey”で大きく変化したキャンパスを見た。Battle Creakの校内に飛行場を持ち、Boeing 747の実物を置いた航空科で世界中の航空会社のパイロット訓練も引受けている等想像外だった。入学時に「3人に1人は卒業できない。」と言われた大学、学生達が真剣に勉強している姿を見る事が出来た。

フルブライト留学制度は今も存続し、毎年応募者の紹介依頼が来る。過去60年間で6,800人の日本人が留学し、文系では皆無だが、理医系では利根川進、小柴昌俊、下村脩、根岸英一と4人のノーベル賞受賞者が生まれている。1992年(40周年)及び2002年(50周年)の記念祝典には両陛下がお出でになり直接お話しさせて頂いた。両陛下の素晴らしいお人柄と鋭い洞察力に深く感銘を受けた。手術後訪英されお疲れなので2012年の60周年記念祝典へのご出席は如何かと心配されたが、ご来場頂けた。ルース大使も感謝の意を述べられた。同伴した家内は今回も皇后陛下にご挨拶でき、10年前に生まれた孫にお言葉を頂き感動していた。

翌日行われたシンポジウムでは1960年留学生でノーベル化学賞を授与された根岸英一博士が「ノーベル賞受賞確率は10の7乗分の1、東大卒業で10の3乗分の1、そこから先は崖登り。英語を勉強してフルブライトの10の4乗分の1、Life must go on. 最も優れた教授について10の5乗の1に登った。」と言っていた。「日本の教育はBottom upでなくTop pull upにして英

才を育てた方が全体の水準の引き上げに効果的」とも。数の上でも中国、韓国、台湾の留学生に劣後する日本を嘆かれた。

II.③ 我がWMU滞在記

伊藤（旧姓関根）典子

日本大学・大学院教授

1965年8月31日 WMU 入学

1967年12月16日 WMU 卒業

itou.noriko@nihon-u.ac.jp

(1) WMU入学

1965年に入って早々、私は University of Illinois と Western Michigan University に入学願書を出した。当時、私は Chicago から北に 8 マイル行ったところにある Glenbrook South High School の交換留学生だった。同年 4 月に Western Michigan University の Student Admissions Counselor の Mr. Marlon Gerould より面接をしたいので Kalamazoo に来るようにお知らせをいただいた。同時に University of Illinois からは審査の結果入学を許可する旨の手紙を受け取っていた。イリノイ大学は州立だが、私は日本からの留学生のため、non resident に相当するため授業料が安くなる訳でもなかった。1964 年の 8 月 1 日に Chicago の O'hare Airport に着いて以来、一度もイリノイ州から出たこともなく、なんとなく他の州が良いなあーと考えていた。

当時は、私費留学生なるものは存在せず、日本から 20,000 円しか持ち出せなかった。しかも 1 ドル 360 円だった。日本の大卒の初任給が月収 17,000 円の時代だった。奨学金を貰える訳でもないし、両親から仕送りしてもらっても、日本銀行に承認されない限り、送金は許可されなかった。しかし、私は何も考えず、1965 年 5 月 14 日、スイスからの交換留学生 Elizabeth Bopp と一緒に Chicago の Union Station から朝 8 時 40 分発の電車に乗って、4 時間以上かけて Kalamazoo に降り立った。Western Michigan 大学は学生数約 16,000 人、ダウンタンから少し離れた小高い丘の上にある緑に囲まれた眺めの良いそれはそれはなんとも美しいキャンパスだった。一目で魅せられてしまった。Mr. Gerould にお会いした。大変穏やかで人を包み込むような雰囲気を出す感じの良い紳士だった。私もすっかりリラックスして、1 つ質問されると、3 つくらい答えてしまった。Mr. Gerould の名前を日本語で書いたら、飾っておくと大喜びしてくれました。

その後、昼食をし、dorm 見学をした。寮生が Elizabeth と私に寮内を案内してくれ、地下の洗濯室、アイロンをかける部屋、まるでホテルのような 1 階のロビー、2 階からは学生の部屋になっており、2 人部屋から 6 人部屋まであった。3 人部屋でも study room と bed room の 2 部屋があった。帰るときにこの dorm の寮母さんから“典子もこの寮に住めるといいね”と再会を

約束して別れを告げた。そして **students' union** へ行き、あまりの大きさに驚いた。学生たちの目には輝きがあり、高校にはない活気と大人の雰囲気を感じとられた。学生に快適な環境の下、思う存分キャンパスライフを満喫できるように調えられてあった。Kalamazoo 滞在は6時間弱だったが、大変充実した1日だった。帰りはバスに乗り、約4時間半かかって、Glenview に戻った。バスの旅は快適で、外の景色が見事に移り変わっていった。空が段々薄暗くなり、夕焼けが見え、月が出て、星が輝き暗くなっていく風景は、大変印象深く、47年も経った今でも脳裏に焼きついている。Glenview に着いたときは、すでに11時を回っていたが、安堵感と満足感、充実感で満ち溢れていた。そして1週間後の5月21日、Mr. Gerould から嬉しいお知らせをいただいた。“I am happy to inform you that you have been admitted to the General Curriculum for the fall semester, 1965. Enclosed you will find your official letter of admission.”

1965年8月23日、私は Ernest Burnham の206号室に落ち着いた。高校時代も大勢の人たちに迷惑をかけたり、面倒を見てもらったりしたが、これから1967年12月のWMU卒業まで、数限りない人々に精神的にも物質的にもお世話になりっぱなしだった。泣いたり、笑ったり、喜んだり、悲しんだり、怒ったり、がっかりしたり、嬉しかったり、挫折したり、我がWMUでの青春に悔い無しだった。デトロイト近くの Southfield 出身の Martha と北ミシガンの Harbor Springs 出身の Sandy がルームメイトだった。2階の proctor に選ばれた。また今学期は奨学金がもらえないことがわかり、Ernest Burnham Hall のカフェテリアの食器洗い場で働くことにした。お陰で寮生全員が“Hi, Nori!”と声をかけてくれた。勉強と友達とバイトの詰まった2年4ヶ月のキャンパス・ライフだった。

(2) WMU で学んだもの

当時の WMU は trimester つまり Fall Term 8/31 ~12/18 (first semester) Winter Term 1/4 ~ 4/16 (second semester) Spring Term 4/25 ~ 6/15 (third half semester) Summer Term 6/21 ~ 8/12 (third another half semester) をかかげ、1965年8月30日に新入生、転入生4,000人を迎えた。1セメスターに最大18単位とれ、1年で54単位取得できた。『College Writing』『Freshman Reading』『Early Western Civil』『Physical Geography』『Physical Science』『Man and Society』『Arts and Ideas』『Introduction to Non-Western World』『Criticism of Mass Media』『American Government』一般教養選択必修科目40時間/単位、そして Bowling, Swimming, Golfing 等の Physical Education4時間/単位、Major 30単位、Minor 15単位、全部合わせて卒業に必要な単位が124単位だった。私は、『International Relations』や『American Cultures』『Race Relations』『Cultural Anthropology』『Ancient Greece』などを取っているうちに、私の Major は Social Science となった。さらに『Psychology of Personality』『Developmental Psychology』『Abnormal Psychology』等16単位も取ったため、Minor は心理学となった。

フランス語、スペイン語、ラテン語、アメリカ文学と文化、イギリス文学なども学んだが、1 セメスター15 週、4 時間数/単位だと1 週間に4 時間授業があり、7 週目に **mid-term**, 14 週目に **finals** がある。入学早々の初めてのセメスターで、欲張って1 週間18 時間も取り、カフェテリアで毎晩2 時間半働き、『**International Relations**』には15 週間で12 冊も本を読まなければならず、さらに **term paper** を5 回も提出しなければならなかった。記述式の試験もあったが、圧倒的に **Multiple Choice** 形式の試験が多く、問題を全部読んで、5 択から1 つ選ぶにはテクニックとスピードが要求された。しかし、たいしたことはないだろうと高をくくっていたら、**Fall Term** の新学期に **GPA** がなんとぎりぎりの **2.15(C-)** だった。**Room and Board 412.50** ドルの **scholarship** がもらえなかった。しかし、アメリカは本当に学びたいと頑張っている私に、**Room** だけの **132** ドルを1 年目の **Winter Term** に与えてくれた。その **Winter Term** からがむしゃらに勉強をし、要領も得たので、**GPA** も卒業までに平均 **3.28 (A-)** に持っていったことに自分で自分を褒めてあげたかった。その後卒業まで寮費の奨学金をいただき、生活費を払う必要がなかった。

(3) キャンパスライフ

月曜日から金曜日まで寮から授業へと通い続けた。1 時間目は朝8 時からスタートしたが、さすが1 時間目の授業はとらなかつた。2 限目は9 時から9 時50 分まで、お昼には寮に戻って昼食をし、また午後の授業へ行った。夕方の4 時には部屋に戻り、5 時のカフェテリアの皿洗いのバイトまでいつも死んだように1 時間は寝た。とても私の体力は夜まで持たなかつたのだろう。5 時から7 時半まで働いて、部屋に戻って、少し休んでから、毎晩毎晩午前2 時まで勉強をした。しかし、雪が降って積もると、ルームメイトとカフェテリアからこっそりお盆を持ち出して、洋服の中に隠し、池の横にある丘からそのお盆に乗ってキャーキャー大声を出して滑り降りた。まるでそりに乗っているようだった。

私のルームメイトもそれぞれマイペースでやっていたが、他の部屋では「うるさい」とか「集中できない」とか「窓を開けると寒いと言ってルームメイトから怒られるので、息が詰まりそう」「ルームメイトがカレシの話しかせずウザイ」や「授業で必須図書がある」などなど、図書館で勉強する子達もいた。図書館は真夜中まで開いていたし、コーヒーやクッキーなども自由に飲んだり食べたりできた。また **mid-term** や **finals** 中には「**study break**」があった。カフェテリアでコーラやポテトチップスやクッキーが出て、孤独と戦いながら試験勉強をしていると、皆同じ状況のもとにいることを確認しあい、安堵している。まるで運命共同体のようだ。

金曜日の夜から待ちに待った週末が始まる。机にかじりついているWMU生は皆無だ。**Ernest Burnham Hall** の寮生かルームメイトが実家に帰るけど一緒に行かないかと誘ってくれる。あるいは、デートに誘われたり、どこかでやっている **mixer**(ダンスパーティ)へ行って知らない人たちと踊ったり、誰かがどこかに誘ってくれ、寂しい思いをしたことがなかった。**Kalamazoo** のホストファミリーの **Bryan** 一家、**Foreign Students Advisor** の **Mrs. Beeler**, 日本史の **Dr.**

Nahm, 村上由紀子さんのホストファミリーだった Boughton 夫妻, WMU の教会の望月実牧師らが、よく外国人留学生を招待してくださった。International Club のパーティにもよく誘われた。



(4) WMU で得たかけがえのない友だち

同じ授業をとっているだけでは、中々友人はできない。同じ寮やルームメイトを通してかけがえのない友人ができた。Ernest Burnham Hall には2年間いた。1965年8月30日から6月15日まで206号室にSandyとMarthaと2部屋をシェアした。MarthaはChristian Scientistで薬は一切受け付けなかった。シングルベッドが1台、バンクベッドが1台あったが、Marthaはバンクベッドの上の方に寝て、私は下の方に寝ていた。ある夜中、Marthaはお腹をこわしたのか、10分毎に上のベッドから下りて、トイレに走って行った。”I have a medicine for diarrhea. Why don't you take it?”とMarthaに声をかけると、”No thanks.”と言われてしまった。それでもトイレに行き続けているので、”Are you all right?”と尋ねると、隣室へ行き、聖書を静かに読み、結局ベッドに戻って来なかった。Spring Breakには彼女の実家に呼ばれ、High Schoolのときには見たこともない家庭環境だった。ご両親は共働きで、お母様はSocial Worker、「屋根の上のヴァイオリン弾き」のミュージカルに連れて行ってもらった。生まれて初めてのミュージカル観賞だった。

Sandyは、人口わずか800人の小さな村Harbor Springsの出身で、2年間のCommunity Collegeを終えて、転入生としてWMUにやって来た。金髪の青い目の可愛い女の子だった。寮の2階には有料電話があったが、”Nori, can you show me how to use a telephone?”と言われ、耳を疑った。直通電話はなく、オペレーターを通してしか電話できないのである。彼女の実家は



花の温室栽培している。入学してから2ヵ月半後の感謝祭の1週間の休みに彼女の Harbor Springs の実家へ行った。ご両親はオランダからの3世で、勤勉実直だった。Sandy は長女で、弟が2人、妹が1人いた。末っ子の弟 Chuck は13歳、私が珍しいのか何度も何度も見ていて、話しかけると恥ずかしそうに下を向いていた。彼女の40周年の結婚記念日が Harbor Springs で行われたが、私も呼ばれて日本から駆けつけたのは4年前だった。

1966年8月29日から1967年4月16日まで再び Ernest Burnham Hall の220号室の住民となった。Kalamazoo から80マイル北にある Plainwell 出身の Cinny とイリノイ州のシカゴから近い Berwyn 出身の Sue がルームメイトだった。Cinny と Dinny はチャーミングな双子で、とても心優しい人たちである。彼女たちとは、1965年からカフェテリアで一緒に働いた。コーネル大に行っているお兄さん、3人の可愛い妹、2人の弟がいた。Plainwell の家にはほとんど毎週末連れて行ってもらった。お父様は、Plainwell High School の数学の先生で、フットボールのコーチだった。ご両親はWMUの同窓生で、出会いはもちろん WMU だった。大家族なので、あんなに大きなお鍋を見たことがなかったし、また皆さん食べるのも速く、気がついたときは、食べるものが何もなかったことが度々あった。本当に愛に満ち溢れた理想的な家族だった。Cinny も現在は、ミシガン州の南の小さな村 Buchanan に住み、7人の子供がいる。ご主人の Mike は Buchanan High School の副校長で、フットボールのコーチだ。私の長女は、高校2年のとき、Cinny と Mike にお世話になり、1年間ホームステイしていた。また、彼らの長女 Becky も日本に来て、我が家に2年いて、私と一緒に NHK ラジオ第2放送で、月曜日から土曜日20分間1日3回『上級基礎英語』のアシスタントを勤めてくれた。

Cinny の双子の姉 Dinny は、WMU 卒業後 Peace Corps でブラジルへ行った。そこでブラジル人に会い、ミシガン州に戻り小学校の先生をしていたが、3人の子供を置いて、29歳で亡く

なった。Dinny の子供たちはご両親に育てられたが、長女の Connie と末っ子の Luke も日本に来て、我が家にホームステイしながらノバで教えていた。Luke は WMU 出身だ。

Sue は優秀な真面目な学生だった。判らないことがあると、彼女に頼ってばかりいたが、必ず正解を出してくれる人だった。ご両親はチェコからの2世で、彼らで作ってくれたチェコ料理 Dumpling は本当に美味しかった。Sue は一人っ子で、自立していた。私は卒業後 Michigan State University の交換留学生としてスイスのローザンヌに行ったとき、Sue も西ベルリンの自由大学への交換留学生だった。私がルクセンブルグに着いたら、Sue が迎えてくれ、翌日から”Let’s hitch hike!”と言われて、驚く間もなくルクセンブルグ、フランス、スペイン、ポルトガル、スイスと回ったヒッチハイクの思い出が甦ってきた。彼女は 182cm、私は 152cm、30 センチも違う2人がヒッチハイクしている様子はまるで野次喜多道中のようだった。2人共ヒッチハイクのことを親には話さなかったが、Sue の両親にわかってしまった。お母様が”We gave her enough money.”と嘆いていた。現在はオクラホマ州に住んでいる。

1967年8月29日から12月16日まで、4年生の女子のための Henry Hall の A204 へ入寮した。ルームメイトは LouAnn だったが、おとなしいがサバサバしていて、彼女のお母様から送ってくる Dill Pickles と Chocolate chips は美味しかった。Henry Hall には4ヶ月しかいなかった。LouAnn は Spring Term 中は実家に戻って教育実習の予定だったし、私は卒業だった。この最終学期には5科目、18単位もとり、さらに運転免許証もと超多忙な学期だったが、一番落ち着いた日々でもあった。

日本人のお友達も沢山いた。石井(中曽根)美智子さんは、私が Glenbrook South High School 生のとき、Chicago Tribune を通じてホストファミリーを見つけたことが記事になっていた。私の1年目に、私の部屋によく遊びに来てくださり、二人で日本語が通じない人たちに嫌な思いをさせてはいけないと、早口で日本語を話し、一緒にラーメンを食べてパーティをやったことをよく覚えている。彼女のホストファミリーの家にも招待され、ミシガン湖畔にあった超豪邸だった。慶応の村上奨学金で留学していた高橋朋代さんともよく一緒に遊んだ。誕生日が5日しか違わないのに、大人の雰囲気を持った人だった。Montreal の EXPO でも一緒に働き、同じアパートに住んだ。フルブライト奨学生の大学院生田中栄治さんとは、留学生として招待されたとき、夫婦と間違えられたりした。アメリカ人たちにソロバンをやって見せたり、暗算をやって驚かせていた。慶応出身の Paper Technology 専攻の竹尾稠さんの家に日本人が集まって、よく日本食を作って食べた。その中に大栗邦義さんがいた。沼津からの交換留学生の小池章子さん、大学から大学院へ進んだ岩瀬恒子さん、沼津からの Kalamazoo の高校の交換留学生だった高村(旧姓神崎)憲子さん、沖縄(当時は琉球)からの前田さんや伊志嶺さんも同期だった。毎年 Homecoming のとき International Festival に参加して、着物を着て、書道や日本舞踊を見せりもしました。毎年 WMU には 14~15 名の日本人がいたが、WMU は、いつも外国人留学生を暖かく包みいれてくれた。

(5) アルバイト奮戦記

WMU に入学以来、月曜日から金曜日まで2時間半、Ernest Burnham Hall のカフェテリアの皿洗いのアルバイトをした。時給1ドルだった。日本からの送金もままならず、お小遣い位は自分で稼がなければいけないと、働いたが、同年代の人と働くことにより、アメリカの文化、言語、スラング、考え方、生活観、経済観念、社交性、協調性、他人に対する配慮等数限りない多くのことを学ぶことができた。専攻分野の違う人たちと働くことにより、異なったメンタリティーにも柔軟に対応できるようになった。なんと言っても毎晩働くのが楽しみだった。



Sandy が突然、1966年の夏に Harbor Springs にある Colony Inn で Cocktail Waitress のバイトが決まったので、今年もやる予定だった Birchwood Farm Lodge のウエイトレスの仕事は私に譲ってくれるという良い話が飛び込んできた。4月から2ヶ月間の half term を終えて、6月16日 Harbor Springs へ飛んで行った。Harbor Springs は住人がわずか800人、夏はミシガン湖で泳いだり、セーリング、ウォータースキー、ゴルフ、乗馬を楽しみ、冬にはスキーやスノーボードができる風光明媚なリゾート地である。眼下に真っ青な湖が見え、緑の木々に囲まれ、美味しい空気があふれ、3ヶ月間こんな美しいところで過ごせた私は、本当に幸せ者だった。

Birchwood Farm Lodge はリゾート地のホテルだった。ケンタッキー州、テネシー州、アラバマ州等から避暑のため北ミシガンにやって来て、別荘に落ち着いたり、ホテルに長期滞在している。ホテル内にあるレストランでウエイトレスとして働いた。シフトは朝食、昼食、夕食で、時給はなく、チップだけが収入だった。ウエイトレスは6名、バスボーイ（食器をさげる人）2名、プールの life guard 1名、ホテルの事務職員1名、5州からの全員現役の大学生だった。この仕事を得るには2～3年前から探さないと見つからないそうだ。涼しいし、1日中働かなくても良いし、学生には大人気だった。女性8名 Milk House という小屋で共同生活をした。もと

牛舎だったそうだが、そんな悪くはなかった。夜は一緒におしゃべりをしたり、情報交換をしたり、寮生活の延長のようだった。



北ミシガンには native American が多かったので、私はよく間違えられた。日本からだと言うと、”Japan? It’s the end of the world.”と同情され、チップを沢山もらった！朝食はオレンジジュースとミルクかコーヒーとパンケーキかフレンチトーストで 1 ドル 75 セントだった。10%から 15%のチップが相場なのに、朝食代以上の 2 ドルもくれた人もいた。昼のローストビーフサンドイッチが 4 ドル、夜で一番高価な Boneless New York Strip Sirloin – King Size で 5 ドル 75 セントだった。黒いエプロンに大きなポケットが両側についていたが、働いた後、なんと両方のポケットに硬貨がぎっしり詰まっていた、ミルクハウスまでコインが重く歩いて帰れない程だった。着くや否や一番にすることは、ベッドの上にポケットの中のコインを全部出して、数えることだった。6 月 18 日から 8 月 19 日まで、なんとチップだけで 700 ドルも稼いでしまった。当時 1 年間の WMU の授業料が 600 ドルだった。

翌年の 1967 年には、カナダのモントリオールで開催された Expo67 の Japanese Pavilion の information desk で働いた。モントリオール駐在の JETRO から電話で採用とのことだった。4 月 16 日に finals を終え、結果も知らずに所持金わずか 30 ドルを持って、カナダへ向かった。ミシガン州とカナダの国境の街 Windsor で、working visa の書類不所持で通してもらえなかった。あわててモントリオールの JETRO に、Immigration Office にビザをおろす旨電話をしてもらった。予定が狂い、路頭に迷っていると、カナダの Hamilton からのおばあさんが彼女の家で泊まるように助けてくれた。ポーランドから 37 年前に移民して来て、3 人の子供は、医者、弁護士、看護婦になっているとか。一晚足を伸ばしてゆっくり休むことができた。

ミシガンの田舎からやってきた私は、モントリオールというヨーロッパの香りのする大都会にすっかり度肝を抜かれてしまった。きれいな地下鉄も完備していた。ミニスカートでブーツを履いた女の子が街中を闊歩し、フランス語が流れてきた。そして、アパートを見つけて、やっと落ち着いた。そして、日本館のホステスとして約4ヶ月働いた。夜はフランス語を習いに語学学校へ通った。また単位取得のため、WMUの通信教育で心理学を2科目とり、8単位取得することができた。Expoで働く人たちのためのパーティが色々なところで開催され、様々な人たちと会うことができた。3年後のExpoが大阪で開催予定だったので、カナダ、アメリカ、ソ連、日本が4本柱になっていた。高校や大学の時のお友達がExpoのために、私のアパートに沢山遊びに来てくれた。Expo会場はどこも入館に長蛇の列だったが、私のホステスのIDを見せるだけで、並ぶ必要がなく、皆から一目置かれた。

イギリスからエリザベス女王、フランスからドゴール大統領、エチオピアからはハイレセラシエ、日本からは高松宮と妃殿下が見えた。この写真は、モントリオールの新聞に載せられた。



ドゴールはどこに行っても”Vive le Quebec!”と訴え続け、人気を博していた。私は、彼の大きな手と握手ができ、感動した。鼻の高い、2メートルもある長身だった。カナダのフランス語圏で貴重な経験・体験ができ、さらにお金も稼げ、全く一石三鳥の成果だった。

(6) WMU 卒業

モントリオールでの Expo のアルバイトを 8 月 10 日に終え、Quebec City, Prince Edward Island, Boston に立ち寄って、バスでシカゴまで戻った。そして 1967 年 8 月 28 日に第二の故郷 WMU に戻って来た。あと 16 単位とれば、卒業できるところまで来ていた。この Fall Term で終わることができるように、頑張った。4 年生の女子寮の Henry Hall の A-204 号室に落ち着いた。友人たちは、ほとんど卒業したり、教育実習だったり、留学したりで、知っている人が少なくなってしまう。International Club にも顔を出さず、12 月に卒業できるよう頑張った。



なにしろ 12 月 15 日に final 試験を終え、翌日の 12 月 16 日が卒業式だった。ガウンやキャップを注文し、卒業式の招待状を作ったり、卒業リングを買ったりしたが、もし 1 科目でも落第したら卒業できないと考えると少し不安になって来た。就活の暇もないし、なにしろ単位を取得しない限り卒業ができない。1967 年 12 月 16 日、ついに長い間の夢だった卒業、そして BA を取得することができた。アメリカの両親 Mr. and Mrs. Conway, Glenbrook South High School の恩師がわざわざイリノイから駆けつけてくれました。

モントリオールの体験が、私には大きな刺激となり、どうしても本場で勉強したいという気持ちが頭から離れなかった。Michigan State University が行っているプログラムに応募し、めでたく合格し、1968 年 4 月 22 日からスイスのローザンヌに行くことになった。WMU の Alumni Newsletter, Spring, 1968 に”Miss Noriko Sekine from Japan was selected by the American Language and Educational Center of Michigan State University to participate in its accelerated French language study course in Lausanne, Switzerland, this spring session.”と載った。そして、1968 年 1 月と 2 月にバスで中西部、西海岸、南部など 40 州以上回って、ニューヨークから日本に戻らず、ヨーロッパへ向かった。

II. ④ International House

高村 憲子（旧姓神崎）

1966年8月から1972年7月

takamur@mbm.nifty.com

高校卒業後の1966年の8月下旬にカラマズー空港に降り立ちました。姉妹都市である沼津からの留学生としてです。Walker 家に受け入れて頂きカラマズーセントラル高校で一年過ごし、翌年 WMU に入学しました。そのころ日本人留学生は8人程。

最初の2年半はキャンパス中央に近い Siedschlag Hall で暮らし、1970年春に村上スカラシップで来ておられた於久田(端)計子さん達と近所の学生アパートで暮らし、夏学期に Western Avenue に面した一軒家に移りました。友人達の間では International House と呼ばれたのが、何年も後に曾我先生が写真に撮ってお送り下さったこの家です。

ルームメートは、ジャマイカからで、ギリシア人を父に持ちマリアカラスに似た顔立ちと素晴らしいプロポーションの マリア、台湾国籍で、エンジニアの養父の都合で主にヨーロッパで育ったキャシー・ウォング（シャーフーウォング）、プロのインド舞踊の舞姫で、ニューデリーから来たマンジュ、少し遅れてそれまでお姉様一家と暮らしていたインド系ケニヤ人で英国国籍を持っていたスシことスハシニ・ダッタが合流しました。その前年度、何故かアラブとイスラエル紛争のとぼっちりで私が会長をしていた International Club で出会い、気の合った仲間です。

カナダからの60人程の生徒を入れても留学生は200人足らずの時代でした。

いろいろな国籍のパーティーで、私たち5人は壁の花としては結構華やかな方だったと・・・勝手に思っています。

International House には私と付き合い始めて間もない頃の高村守、それにマイク木戸さん、大嶋さんやはり村上スカラシップでおいでの方の三瓶由美子さんらが常連として出入りしました。特に大嶋さんはマンジュやスシと学部が同じで彼女らと親しく、私が降参、と寝てしまった後朝までマンジュ達を付き合い合せてました。覚えておられるかしら。もうお一方、この1970年の夏の珍しい常連さんは曾我先生でした。奥様がお子様達と日本に帰っておられた間、我が Kitchen International House で、有料で夕食をすませ、苦学生の私たちを助けて下さいました。いつもお口にあったわけでは無かったと思いますが、マリアの作ったカレー等を、腎臓が片方しかないので、とおっしゃり、大汗をかきながら召し上がっていた姿を思い出します。

残念なのは、この中で我が夫守と、あっと振り向く程かわいらしく美人で、同時通訳の世界で活躍した由美さんが90年代前半に相前後して鬼籍に入ってしまったことです。そしてこの度、あそこ大嶋さんと付き合い始めていた清子さんまで・・・。黙祷。

卒業後、マリアは当時ウィスコンシン大学で Phd をしていて、何度も International House に遊びに来ていたマイケルと、望月牧師の司式で Kanley Chapel で結婚。現在アトランタで医師になっているマライカを生みましたが、University of West Indies の経済学の教授になった数学の天才マイケルとは別れて再婚。再度分かれてアトランタで介護の仕事をしています。

海洋微生物学が専門だったキャシーは、WMU の政治学科に教えに来ていた教授に見初められて結婚。香港でそれぞれ別の大学で教えています。すっかり良い年になっても彼の焼きもちに苦労しているとか・・・。ニューデリーに帰ったマンジュは、コーネル大学出身の貿易会社社長と結婚して娘二人を育てながら、インド舞踊の使節等としても活躍しました。キャシーもマンジュも守の生前、夫婦揃って我が家を尋ねてくれました。

そしてあの夏すでに WMU で教えていたスシは、ミシガン大学で経済学の Phd を取ったあとも WMU の政治学科で教えています。幼なじみで映像関係の仕事をしていたカンティと故郷ナイロビで結婚。カンティも専門をいかして WMU で職を得ました。アメリカ国籍も得て、男女二人の子供に恵まれました。

毎年のようにヨーロッパやアフリカの親戚や友人を尋ねるスシは、夫婦で一度、一人で2度来日して、我が家に滞在しました。年下ですが、姉のような貫禄でマリアやキャシーとの縁をつなぎ止めてくれています。

さて、私は1970年の暮れに卒業し、一時帰国して守と結婚。守が WMU と UCLA で修士を終えた1973年暮れにカラマズーに寄ってから、ヨーロッパ回りで帰国しました。3人の娘を育て、未亡人になり、二人目の孫が生まれて間もなく、次女の車いす探しを口実に、マンハッタンで14ヶ月暮らしました。その間2003年の WMU へのホームカミングに参加して、30年ぶりにカラマズーを訪れ、曾我先生御夫妻のすみずみまで心の行き届いたお宅にお邪魔し、変わらず息の合った御夫妻のたたずまいに触れ、おもてなし頂き幸せな時を過ごしました。

勿論スシー家を驚かせて旧交を温めました。そして次の春マンハッタンのアパートを訪れたスシと、劇を観たり、セントラルパークを散歩したり、中華街に繰り出したりしながら過ごした一週間は忘れられません。

翌年のニューヨークからの帰国の際は、1996年の村上スカラシップ生で我が家にホームステイしたシャルルが、大きな車いす仕様のバンを運転して、大陸横断を助けてくれました。もう一度カラマズーに寄って、カンサスシティから飛んで来た藤島さんも、ラピッドシティまで同行して下さったのが楽しい思い出です。

スシは2008年にもシンガポールでの結婚式の帰りに寄ってくれ、3泊だけだったけれど、のんびりおしゃべりして行きました。ちょうど二子玉川の花火の頃で、娘一家も一緒に楽しみまし

た。あまり年取りすぎる前に5人が何処かで会えたら良いのにね、と話し合ったのですが・・・。
もしも実現するようなことがあったら、曾我先生ご夫妻と大嶋さんにはご招待状を送らせて頂きます。



II.⑤ 我が心の Western Michigan University

鈴木 茂 ('82)

取得学位: Bachelor of Arts

Major: Physics

Minor: Mathematics

在学期間: 1978年8月入学～1982年8月卒業

「カラマズー会 50 周年記念」として、WMU で過ごした 4 年間における多くの思い出の中で、今も心に残っていることを書いてみることにした。

秋の季節

Western Michigan University のキャンパスも、10 月の中旬頃からは、紅葉が始まる。

そして、11 月ともなると、時折、小雪がちらつき始める。しかし、Thanksgiving Holidays (感謝祭の祭日) が終わるまではあまり積雪はない。従って Fall Semester は、あまり雪の心配がない。でも、気温は、ぐんと下がって氷点下である。ダウンジャケット、毛のスキー帽、マフラー、それに手袋は必需品である。教科書やノートは、全てナップザックに入れて歩く。私のナップザックは、赤と黒。Kalamazoo では自転車も購入した。これも赤と黒。日本のメーカーである「シマノ」のもので、その後、大学院を卒業するまで約 7 年間お世話になった。

そして、秋の季節の終り頃には、Valley の池に、「カナディアンギース」の群れが越冬のために飛来する。毎年の光景だ。Permanent residents の白鳥のペアも元気。

冬の季節

Winter (Spring) Semester は、翌年の 1 月早々から始まる。この頃になると、積雪も多くなる。そして、早朝の授業への雪道が滑りやすくなる。雪がちらついているときには、まだ暗いので、街燈からの光が、降ってくる雪の結晶に反射して美しく輝いている。俗に言う「ダイヤモンド・ダスト」である。この雪の結晶を手のひら(手袋)に載せると、ほんとうに綺麗な雪の結晶が見られる。「中谷宇吉郎」の世界だ。ほとんどの場合、天気は曇りがちでどんよりした日が続く。しかし、授業が終わったときに、たまに太陽が顔を出すと、雪面が美しく輝く。早朝の場合には、空が綺麗なピンク色になる。本当に。

Western Michigan Univ. の West Campus は、丘陵状になっているので、冬には西からの冷たい季節風が強く吹く。Lake Michigan (ミシガン湖) を渡ってきたその風は、まさに肌を刺すように冷たく、そして痛い。メガネ以外の部位は、全て覆うようにする。冬の間、自転車は、部屋の中だ。

しかし、一旦、室内に入れば、暖房がまんべんなくゆきとどいていて、熱いくらいだ。慣れてくれば、ダウンジャケットの下は、T シャツ 1 枚でも OK になる。

雪解けは、4 月の下旬頃から徐々に始まり、5 月には強い日差しが戻ってくるようになる。そうな

ると、もう学期末そして学年末である。そして、Kalamazoo の季節は、春をいっきに飛び越えて夏を迎える。

夏の季節

5月になれば気候は夏。そして、夏になるとドミトリーから飛び出して、近くのアパートメントに移り、授業を一つか二つ取りながら、のんびり過ごす。秋と冬の学期を頑張った自分に対する御褒美だ。

冬眠していた自転車も、眠りから覚めて、フルに活躍する。アパートメントで自炊するために、よく食料品のショッピングに利用するようになる。West Campus の急坂を上り下りして、「Kloger」に食料品を買い出しに行ったり、遠くの「オリエンタル」ショップまで買い出しに行ったりする。

時々、ダウンタウンのチャイニーズ・テークアウトに「ヤキソバ」を買いに行ったりもした。

夏は、自転車に乗ってよく汗をかいた。冬の間、あまり身体を動かすことができなかったから、いい運動だ。

キャンパスには、冬眠していた小動物がもどってくる。リス、チップモンク、プレリードッグ、そしてラクーンも元気にその姿を現わしている。ときには、スカンクも来る。

鳥達も元気、元気。州の鳥であるロビンを始め、カーディナル、ブルージェイ、ブルーバード、チッカディ等いろいろ。それぞれが独特の囀りを聴かせてくれる。Kalamazoo での夏の楽しみの一つでもある。夕闇が迫ってくると、キャンパスの芝生の上には、蛍が飛び交う光景となる。

1. 心に残っている履修コース

(a) 曾我先生の授業

先生の Electricity & Magnetism (電磁気学) の授業は、ブラックボードに書かれて行く内容の説明を聞くことになるが、そのノートのヴォリュームは、半端ではない。

授業の中で特に印象に残っているのは、毎週金曜日に出される Assignments (提出は月曜日)。そして、Take Home Examination である。先生が出される問題は、教科書からのものではなく、先生が独自に考えられたものばかり。従って、どんな本を見ても載っていないから、問題に関して何の参考書もなく、大変である。

そこで、宿題について疑問点があると、土曜日・日曜日を問わず、先生のオフィスに御邪魔してあれこれ質問をした。先生は、いつも机に向かって何かを勉強されていたが、質問に対して何らかの「ヒント」を与えて下さった。

問題には、「～と仮定する」といったような一定の付加条件が必ず記されていて、その条件を加味すると、綺麗な「数式」が「解」として導かれることになる。従って、得られた「解」が醜いと、それは誤りであるということが直ぐに分かるようになっている。

曾我先生のこのクラスを履修したときに、「物理」としての「電磁場理論」の楽しさの一端を垣間見たように思う。そして、私の関心は、工学的な「宇宙空間中の電波伝搬」から純粋な物理学の「波動関数」に立脚した「量子力学」へと移って行くことになる。

ある日、大学院へ行く前に、曾我先生に「朝永振一郎先生の『スピンはめぐる』をぜひ一読してみなさい」、と言われたことがある。早速、日本にいる親に依頼して郵送してもらった。

『スピンはめぐる』は、量子力学について説明した講義を基に書かれたものだが、量子力学をその歴史的発展の視点から学ぶことができる、なかなか面白い内容のものであった。

(b) English105 “Writing-Exposition”

English 105 の講師は、Crystal G. Paulsen という大変に美しい女性で、Univ. of Michigan at Ann Arbor で Master's degree を取得した人であった。もともとの出身は、南部(詳細は聞かなかったが)であるという。彼女こそ、勉強に対する意欲を私に盛り立ててくれた人であった。

彼女の最初の授業の内容がほとんど聞き取れなかったということを今でも憶えている。それは、女性特有の早口(?)だったことと、その「英作文」の授業が当然ながら「Native Speakers(アメリカ人)」を対象とした一般教養のクラスだったことによる。そこで、クラスが終了したときに、彼女のところへ行き、直ぐに質問した「次回まで提出する宿題について教えて下さい」と。そのときのちょっと驚いた彼女の顔をいまでも忘れぬ。でも、親切に宿題についていろいろ教えてくれたし、「授業について質問があるときにはいつでもオフィスに来るように」とも言ってくれた。

彼女のお陰で、授業の前に教科書等、指定された文献を必ず読んで予習をしてくること、宿題をタイプして提出すること、直されて返された宿題は、どこが直されたかをよく理解してから(即ち、復習してから)リタイプして再提出すること、それらを(徹夜してでも)必ず期限までに提出すること等、その後一般教養の他の授業に対しても必要となった学習事項や学習態度について修得できた。勿論、英作文は、急速に上達していった。

フレッシュマンから進級した後、キャンパスを歩いていると、ときどき彼女とキャンパスで出会うことがあり、よく挨拶をした。そして、数年経ち、卒業近くになって、キャンパスにて「おや、なかなかの美人が歩いているなあ」と思ったら Crystal であった。挨拶をして立ち話をしていると、みんなが羨ましそうに見ている。それ程の美人であった。

(c) Honor's course 1 (Humanistic Education)

これは、Department of Education の著名な教授による授業で人気があり、かなりの人数がクラスにいた。Honor students のクラスだからみんな優秀な連中で勉強も遊びも意欲的である。この Honor's class では私もクラスメートからいろいろ学ぶことができた。特に、グループに分かれてプロジェクトを行うことになり、地元の Kalamazoo Central High School の校長先生を一人で訪問してインタビューしたことが記憶に残っている。「大学へ進学するための高校の授業」についてインタビューした。最後にグループ全体による研究発表があった。Western では、ほとんどの Honor's students が自宅から通っていたので、彼らとはクラス以外では会う機会があまりなかったことが大変残念だった。

余談だが、Kalamazoo Central High School の卒業生には、**New York Yankees** の **Derek Sanderson Jeter** 選手がいる。

2. トロントへのドライブ旅行

Honor's College の主催による Canada・Toronto を訪れるツアーに参加した。Toronto では、参加者全員で CN Tower をはじめ、いろいろな場所を見学した。また、ディナーのときには、メンバーの一人が予約してくれた瀟洒な「ギリシャ料理」のレストランでワインを飲みながら美味しいディナーを食べた。そして、ディナーの後は、ライブハウスで生バンドによる主にビートルズの曲の演奏と共にダンスを楽しんだ。また、各自のフリータイムには、「チャイナ・タウン」でランチを食べて、University of Toronto のキャンパスを訪れた。

この Toronto を訪れたツアーで、ちょっとしたエピソードがある。

Toronto から米国への帰国時における Detroit に近い Canada と米国との国境にあたる Winsor / Detroit の税関での私の危機を救ってくれた Honor's College のメンバーである女子学生のみんなに感謝している。それは、カナダの郵便局の労働組合のストライキで、学生ビザの期間延長手続きの関係で WMU に預けた「パスポート」が宿泊先のホテルに、出発前に到着するはずだったがまだ手元に届いていないという非常事態が発生した。

これは私だけの問題だったので、宿泊先のホテルに一人残ってパスポートを受け取るつもりだったが、彼女達が「大丈夫、私たちが何とかするから」と「救いの手」を差し延べてくれた。即ち、彼女達は、私が「パスポート」を携帯せずに「米国」へ「再入国」することを計画したのである。

その方法とは、いたって簡単。私を自動車の後部座席の真中に座らせて、彼女達の「魅惑」を振り撒いて「税関」を通過するというものである。

当時、カナダへの出入国は、米国国籍の人達は、パスポート不要であったが、外国人である私は、「米国」へ「再入国」する際に、パスポートを提示することが必要であった(但し、カナダへの入国時は、当時は、提示不要)。

彼女達の「魅惑的な微笑み」のお陰で、私はパスポートのチェックなしに、無事に Winsor / Detroit の「税関」を通過することができた。「税関」を通過するとき私の心臓の鼓動が高鳴ったことは言うまでもない。

3. N.C.H.C. Maine Coast Summer

Western Michigan Univ. の junior year (1980 年) の夏 (6 月) に、National Collegiate Honors Council が主催する「Maine Coast Summer」という「夏期講座」に参加した。

この講座は、米国東部の最北に位置するメイン州 (the State of Maine) の州立大学である University of Maine at Orono で開催されたものである。

カラマズー空港からボストンのローガン空港まで直行便で行き、そこで、メイン州のバンゴア国際空港までの便に乗り換えた。バンゴア空港には、この講座を受け持つ Univ. of Maine の Honor's program の担当である Dr. Schuman が迎えにきてくれていた。簡単な挨拶をしてから「もう一人、カンザスから来る予定なので、待っていて欲しい」と言われた。この一人が、Kansas State University のカーティス (Curtis) であった。車で Univ. of Maine のキャンパスに向かう。オロノの街

は、空港からかなり離れておりスーパーマーケットもWIN DIXIE 一軒があるだけであった。その後、この街が好きになる。小さい街だけに、床屋も歯医者も親切であった。今まで行った街の中でも最も好きなところになってしまった。

(a) Baxter Peak

Univ. of Maine の"Honor's Lounge"(一時的に私が命名)に参加者全員が集めた後、講座が始まる前に、アパラチア山脈の一部を構成しているメイン州の Baxter State Park (バクスタ州立公園)の最高峰 Mount Katahdin (標高 1,606 メートル)の「Baxter Peak」(バクスタ・ピーク)にみんなに登ることにした。

この山があるバクスタ州立公園は、クマを始め、ムース(ヘラジカ)や鹿などの動物が多く棲息しており、それらに巡り合えればさらに面白いことになるであろうと思った。我々は、二つの班に分かれて同じバクスタ・ピークを目指すことにした。(後で聞いた話では、別の班のメンバーは、全員が大きい「ムース」の姿を間近に見て驚いたとのこと。)

はじめは、木々に覆われた急な昇り路に行くことになった。木々が深く視界があまりよくないので、しばらくは、我慢の連続である。そのうちに視界が開けた場所にたどり着くが、それも束の間。更に木々に覆われた急な昇り路に行く。

ようやく視界が開けた草原に着く。そこからは、暫くなだらかな昇り路になるが、明るい高原を散策しているような気分である。その先には、多数の大きな岩が行く手を阻むように続いているのが見えてきた。この岩場は、所々がチェーンなどを備えている本格的なものである。

夏でも涼しいメイン州でも、さすがに汗が滴り落ちる。Univ. of Maine で購入した「クマがプリントされているライトブルーのTシャツ」は、シーズと共に、もう汗でびっしょり。靴は、ボストン時代にダウントウンで購入したアディダスのスニーカー。かなり丈夫にできている。岩場から滑り落ちないようにみんなで声を掛け合って頑張る。

しかし、岩場に入っただけで、ネブラスカ州のオマハから参加してきた多少オーバーウェイトのマイク(Michael)がもう登れないという。そして、引き返すというので、もうすこし頑張れと励ますが、しばらく行ったところで、やはりあきらめるといふ。しかたなく、彼を一人で返すことにした。

岩場をどんどん登ってゆき、振り替えると下界の景色が箱庭のように見えてきた。先はまだ長い。しばらくすると、イリノイ州のノーマル(Northern Illinois University:ノーザン・イリノイ大学)から参加したキャシー(Katherine)が、もう無理だという。足をどうやら捻挫したらしい。女性一人を返すのは、危険でもあったが、しかたないので、一人で引き返してもらったことにした。

岩場は、更に続き、もう一息というところを過ぎたら小さな石が積まれたケルンが見えてきた。ようやくピークが見えてきた。あとは、少しの登りがあるだけである。そして、広いピーク部分に無事に到着。

ピークに立っていると山の斜面を霞が急激に下から沸き上がって来るように登ってくるので、時々景色が遮られるが、少し時をやり過ぎると、霞が晴れて、どこまでも続く青空のもとで、眼下に広がる風景を見下ろすことができる。周りには遮るものが何もないので、風が強く吹きつける。

Baxter Peak には、もう沢山の人が既に登ってきていた。その中には地元の小学生の団体がい

たので、我々の仲間がみんな驚いた。

結局、私の班は、BYU (Brigham Young University)から参加したシェレン(Sharan)、ミネソタ州のツイン・シティーにある St. Thomas College から参加したキャシー(Kathryne)及び私の三人が登頂に成功した。標高は、日本のアルプス等に比べれば、さほど高くはないが、岩場が多く、登頂はかなり本格的なものであった。登り終えた後、何とも言えない快感であった。

待望の「夏期講座」がスタートした。まず、「メイン州」の紹介。主な産業としては、林業(パルプ工業を含む)と水産業(ロブスター漁)が特に盛んであり、観光も重要な産業の一つである等、州内のいろいろな人々による「メイン州」の総括的な説明があった。

(b) Swan's Island

「夏期講座」の最初のコースは、Maine Ecology Course で、スワンズ・アイランド(Swan's Island)に1週間滞在して島の周囲の海岸やそこに住んでいる海洋生物等を学ぶものである。ここでのインストラクターは、University of Pennsylvania(ペンシルバニア大学)で Ph.D.を取得したスコットランド生まれの赤髭先生「ウォーデル」(Prof. James Waddell)教授である。

スワンズ・アイランドは、本土のバー・ハーバー(Bar Harbor)からは、フェリーで約 30 分位のところにあり、小さいが大変に美しい島である。我々は、スワンズ・アイランドにあるコテージに 6 日間連泊することになる。また、講座で利用する施設は、Univ. of Penn. 付属の the Swans Island Marine Station (スワンズ・アイランド海洋研究所)である。ここでは、Univ. of Penn. で海洋学を専攻する一人の大学院生(デニース、女性)が既に研究をしている。デニースは、コンブを採取してきては、それらを広げて長さを計り、それらのサンプルを採っていろいろと分析している。

コテージの前でデニースと話をした思い出を一つ。彼女は、Harvard College(ハーヴァード大学)に合格したが「奨学金なし」という条件だったので自分では学費が賄えず、しかたなく「奨学金」が支給された Univ. of Penn. に入学したとのことである。非常にフランクでかつクレバーな女性である。

このスワンズ・アイランドでの我々の最初のテーマは、4つの異なる海岸の形態における生物の分析であった。各グループ(二人一組)に分かれて各自が興味のある生物の各海岸における生態分布を調べるものである。

私は、Univ. of Maine の学生で「山羊」を飼っているモーリ(Molly)と巻き貝の一種の色模様を、スワンズ・アイランドにある4つの海岸毎に調べることにした。これら4つの入り江は、それぞれが特異な形態を有しているので、巻き貝の分布について、海岸毎に変化が見られるかもしれないからである。上記の「山羊」にはキャンパスがある「オロノ」に戻ってから紹介してもらった。そして、「山羊」の「乳」も御馳走になった。

潮の干満の状態に応じて、まだ夜が明けていない時間に起床し、真っ暗な中、懐中電灯の光だけを頼りに、一定数の巻き貝を各海岸で採取して海洋研究所に持ち帰り、それらの色模様の分布を調べるものであった。

この調査では、採取した岩場の位置(海底からの高さや波の影響)による違いも考慮することにした。ピンク等の色彩のストライプを有する巻き貝が、波の引いた後の水溜まりで降り注ぐ夏の日

差しに反射して、宝石のように輝いて見えた。

眩しい夏の太陽が照り付ける中、授業の合間に、研究所の手漕ぎボートで紺碧の海に漕ぎ出してみた。ちょうど研究所から大西洋の方に向かったところに小さな島がある。その島までボートを漕いで、行ってみることにした。

この島には、瀟洒な別荘があったが、人が居ない様子なので上陸してみると、メルヘンのようなお花畑に黄色の羽が美しい蝶が沢山舞っていた。また、島に上陸すると、別の島の突端にある灯台がよく見えた。

夜になるとその灯台から放射される白い光と、ブイの先端からの赤い信号灯が暗闇の世界でひととき目立っていた。

我々が泊まっているコテージの丁度向かい側に、夏期のみ営業するレストランが開いている。初めは、モーリヤオハイオ州のクリーブランドからきた John Carroll University のウォルター (Walter) とネブラスカ州のオマハからきているマイク等と一緒にコーヒーを飲みに行く。この店は、二人の姉妹(もう50才くらいの年齢)が経営しており、二人とも漁師の奥さんで優しい感じである。店は、毎日開いているのだが、何時行っても客は、我々だけである。

毎日通っているうちにこの二人の御婦人と親しくなり、しばしば会話を交わすようになった。そして、夕暮れ時をこのレストランで二人の御婦人と共に、和やかに過ごすことが日課になってきた。

そのうち私がロブスターに大変興味があることを聞き出したご婦人達が、弟がこの島でロブスターの漁師をしているので、もし興味があれば一緒に「Lobster boat」(ロブスター・ボート)に乗れるかどうか頼んであげると言ってきてくれた。もちろん、私は、喜んでお願いした。

次の日、ツイン・シティーからきたキャシーと一緒に待望の「ロブスター・ボート」に同乗させてもらうことになった。

「ロブスター・ボート」に乗っているときに、漁師の彼にいろいろと質問をした。ベイトには何を使うのか、どれくらいの大きさのものを採ってよいのか等。子持ちの雌ロブスターや、スケールで大きさを量りながら基準よりも小さいサイズのもの、それぞれ海に返すこと等を教えてもらう。

質問をしている間もそれに答えているときも、彼はロブスター・トラップを引き上げては、トラップされたロブスターを取り出して素早くスケールを当てて種分けしたり、トラップのベイトを新しいベイトと交換したりしている。その動作の無駄がないことに感銘した。

乗船していたのは、短い時間だったけれども、メイン州で「ロブスター・フィッシング」を体験できたことは、一生の思い出になった。

いろいろな思い出を作ってくれたスワンズ・アイランドとも明日は、もうお別れだ。

最後の夜もレストランに行ってみることにした。そしたら、私たち(そして特に私)の為にチョコレート・ケーキをご婦人達が造ってくれて御馳走してくれた。ケーキの中央には、ソーセージにスイート・チェリー、そしてティー・バッグでそれらしくあしらったロブスターがスタンディング・フォームで鎮座していた。それがスワンズ・アイランドでの最高の、そして今回のメイン・コースト・サマーで一生忘れられない思い出の一つになった。

島に滞在している間に一つの事故が発生した。それは、ヴァーモント州の Middlebury College

から参加したリンジー(リンドリ(Lindley))が、KSU からきていたカーティスや、メイン大学のジョン(John)と一緒に、岩場から池に飛び込んで遊んでいたときに、誤って岩に激突してしまい大量の出血をしてしまった。幸い命に別状はなく傷口を何針か縫う事で済んだ。彼女は、冬季オリンピックの米国クロス・カントリーチームの補欠選手であった。グリーン・アイの綺麗な瞳をしていたので大変印象に残っている。

その他のメンバーは、New York の Long Island にある Long Island University からきていた二人の女性、ペギー(Peggy)とアイリン(Eileen)である。ペギーは、祖父の一人が日本人で親しみを覚えた。このようなメンバーで約 8 週間を一緒に過ごしたのである。

スワンズ・アイランドには、大して大きくない島なのだが、ビーバーが河を堰き止めて「ダム」を作り、池になっているところがあったりして、本当に楽しい島であった。

スワンズ・アイランドでの一週間の滞在から Univ. of Maine のキャンパスにあるアパートに戻った後、このコースで習得したことを各自がレポートに纏めて発表することになった。昼間は、レポートの作成に追われたが、夜は、気の合った仲間同士が集まって、話しをしたり、ビールを飲んだり、スポーツをしたりして、楽しいときを過ごした。次の Acadians のコースのときも同様であった。

(c) Acadians

夏期講座のもう一つのコースは、"Acadians"と呼ばれたコースで、カナダに入ってアカディアン(Acadians)の歴史を University of Moncton の Director of the Center of Acadian Studies である Dr. Jean Daigle の講義及びフィールド・トリップを介して学ぶことである。

アカディアンとは、フランスからの移民のグループであり、カナダのノバ・スコシア州やニュー・ブランズウィック州に移民してきた人達である。我々は、この講座のコース名の下でバンを借りて、皆で交代してドライブしながらアカディアンに縁のある場所を実際に訪問してアカディアンのことを勉強した。

フィールド・トリップでは、University of New Brunswick の教室で"Acadians"に関する講義を聴いたり、Nova Scotia 等の大西洋沿岸のカナダの都市も見学した。

"Acadians"コースの中で、特に思い出に残っているのは、Lucy M. Montgomery の小説"Anne of Green Gables"("赤毛のアン")の物語の舞台として有名な Prince Edward Island (プリンス・エドワード・アイランド(PEI))を全員一致の意見でドライブ・コースに取り入れて、半日をかけて島一周のドライブを行ったことである。

PEI では、私は、主人公の「アン」が住んでいる家「Green Gables」(グリーン・ゲールズ)の内部を見学したり、Green Gables の付近を散策した。

N.C.H.C. Maine Coast Summer では、講座の修了に際して、各自が自由に選択したプロジェクトの成果を発表することになっていた。私は、「東海岸における Lobster's immigration」について研究した成果を発表した。

楽しかった 8 週間の「夏期講座」は、瞬く間に過ぎ去ってしまった。N.C.H.C. Maine Coast Summer は、WMU で過ごした 4 年間の中で、私が最も印象に残っているイベントである。

4. Friend's Wedding

Western Michigan University で Junior を終えた年、即ち 1981 年に Detroit 郊外の Dearborn で行われた友人の Dale と Sheila の Wedding Ceremony に Dale の友人の一人として式に参加したことである。その日は、奇しくも「私の誕生日」であったから一生忘れることができない。Dale は、私が Ann Arbor で英語を習っていたときのドームのルームメイトで、Natural Resource Economics を専攻している大学院生である。

Wedding Ceremony のための衣装合わせや式のリハーサルも含めて数日前から Dale と彼の友人が住んでいる Ann Arbor にあるアパートメントに泊り込むことになった。そして、Sheila の実家へ行き、大変に美しくそして優しい彼女のお母さんと、直ぐに気が合った弟の Steve にも会う。また、彼女が飼っていたサモエドの「Sam」にも会う。「Sam」とは直ぐに仲良しになった。

そして、Sheila と Dale の結婚式にもフレンドとして Sheila の友人 Carrie (キャリー)と一緒にペアを組みタキシード姿で列席した。式の後、Dale の友人である Dave (College of William & Mary, alumnus)、John (Syracuse Univ., alumnus)、そして Sheila の友人である Susan (Univ. of Michigan, sophomore)、及び Carrie (Univ. of Michigan, sophomore) と私の 5 人で University of Michigan のグラジュエート・ライブラリーのフロントの石段の上でワインを飲みながらいろいろなことを語った。

WMU を卒業した年の 1982 年 7 月に Sheila と Dale の長女 Alison が生まれたので、Detroit まで Alison に会いに行った。そして長男 Alex が生まれた後、彼らが「南アフリカ」の「プレトリア」に行っている間も交信を絶やさなかったし、今でも彼らとの友人関係は継続している。

Dale は、University of Michigan で修士号を取得後、The Department of State に勤務し、President Clinton の元で、一時、National Security Council (NSC) に勤務した、そのときには大統領官邸である「White House」に隣接する「Executive Office」に自分のオフィスを構えて仕事を行っていた。

2000 年の 10 月に再び彼の家に立ち寄った時に、Dale が、彼の NSC 時代の同僚で当時まだ現役の NSC メンバーであった女性の案内で、「White House」の「West Wing」や Dale がオフィスを構えていた「Executive Office」のツアーを特別にアレンジしてくれた。その日は、Clinton 大統領が執務を行っていた日だったので、執務が終了して「West Wing」から「住い」に戻られた夕方の時間帯に、ツアーを実施してくれた。White House では、Oval Office (但し、内部には入れない)、Rose Garden、Press Center、そして特別に Computer Room も見学させてもらった。

Dale は、現在、政府のある機関に勤務しているが、それと同時に、2011 年には、カソリック教会の助祭 (Deacon) の資格を取得した。また、先日、長女 Alison に男の子が誕生して、いよいよ Grand Pa の仲間入りをした。

5. 加速器を利用した「重イオンー原子」衝突物理の研究との出会い

Western Michigan University で Sophomore になったときに Major として Physics, Minor とし

て Mathematics を選択した。入学当初は、電波工学(アンテナ工学)の習得、特に大学院へ進んで「宇宙空間中の電波伝搬」を最終的な研究目標とすべく「電気工学」を専攻することを考えていたが、理工系学生に要求されている一般教養課目の物理(全部で3セメスターに亘る3つのコースで構成されているうちの第3番目のコース)を履修しているときに使用した教科書"Modern Physics" by Paul Tipler (Oakland Univ.)は、Special Relativity, Quantum Physics, Particle Physics 等の現代物理学のエッセンスが興味深く且つ非常に理解し易く記載されていた。

そして、このコースを履修しているときに、マクロ的に電磁波動を記述する「マックスウェルの方程式」ではなく、量子力学の「シュレジンガーの波動方程式」を理解したくなったので、専攻を「物理」に変更することを決意した。

これにより物理専攻のための必須課目及び選択科目を修得することになる。要するに、「波動」という概念を、ミクロの視点から理解したかったのである。それは、留学する前に読んだ朝永振一郎先生が書かれたエッセイ「光子の裁判」というサイエンティフィック・ストーリーに関心があったからかも知れない。

専攻を「物理」に変更し、マイナーとして「数学」を選択して、物理や数学の専門科目を履修することになった。

その傍ら、Honor's College の member として Undergraduate Research Project を選択して、その卒業研究を行うという条件が課せられた。そこで、どのような研究グループがあるのかを尋ねに Department of Physics の Chairman(当時)である Prof. Eugene Bernstein を訪問した。この時に紹介されたのが University of California at Berkeley の Lawrence Laboratory から Department of Physics の faculty member になったばかりの John A. Tanis(当時 Assistant Professor(現在は Professor))であった。その後、彼は、私の人生に多大な影響を与えることになるのだが、この時にはそれを知る由もなかったのである。John A. Tanis は、Hope College (Michigan) を卒業した後、University of Iowa で Master's degree そして New York University (NYU) で Ph.D.を取得している。

John の研究は、Accelerator-based Atomic Collision Physics に関する実験であり、Prof. Bernstein から紹介されたときに彼が Lawrence Laboratory で行った実験の研究論文のコピーを一部もらった。その研究論文のカバーには

Lawrence Berkeley Laboratory

University of California

Accelerator & Fusion Research Division

"Submitted to Physical Review A

RADIATIVE ELECTRON CAPTURE BY CI IONS

INCIDENT ON C AND Cu FOILS

J. A. Tanis, S. M. Shafroth, J. E. Willis and J. R. Mowat

January 1980

と記載されていた(共同研究者の S .M. Shafroth は、私が大学院に通った University of North

Carolina at Chapel Hill での研究の指導教授である)。

Department of Physics を二度目に訪問した時に Honor's College の Research Project を行いたい旨を John に伝えた。John は、早速、私を Rood Hall の地下実験室へ案内してくれた。その時、一人の大学院生に会った。彼は、なにやらの制御盤がある部屋で、Tektronix の装置を使って、いろいろなピークが表示されている画面上に2つのカーソルを移動し、そのカーソル間のピークについて何やら測定している様子だった。「何をしているのか？」と尋ねたところ、「target atom の電子が projectile ion に捕捉されたときに、target atom に vacancies が生じ、その発生した vacancies に target atom の他のシェル・レベル(エネルギー・レベル)から電子が遷移してくる。このピークは、その遷移が生じたときに放出される X 線を示していて、いま、その X 線が放射される量を計測しているところだ。」と、 $K\alpha$ 、 $K\beta$ 等の X 線について説明してくれた。

また、地下実験室には、当時、科学計算用として広く利用されていた DEC の VAX-11 が備えられていた。そして、「Tandem Van de Graaff Accelerator」という「加速器」を初めて見せてもらった。私にとってそれは、「実験装置」として今迄見た中で最大のもの。

これが、私と「Tandem Van de Graaff Accelerator」そして「Accelerator-based Heavy Ion-Atom Collision Physics(加速器を利用した重イオン-原子衝突物理の研究)」との最初の出会であった。

6. ホストファミリー

Ann Arbor で英語を学んでいるときに、English Language Institute が Ann Arbor の教会を通じてホストファミリーを紹介してくれた。私を含む参加者は、Thanksgiving Holidays を利用してインディアナ州の教会までバスに乗って行き、そこでそれぞれの家族に紹介された。私は、二人の女の子、Gwen(小学校4年:当時10才)と Sherry(小学校1年:当時7才)がいる Lew & Mona の家族に迎え入れられた。この家族は、インディアナ州の小さな町で兼業農業を営んでいる。ご主人は、ベトナム戦争帰りで、私が初めて訪れた当時は、「インターナショナル・ハーベスタ(IH)」というトラックやトラクターの最大手でも仕事をしていたが2~3年後に止めてしまっていてそれ以後は、農業だけを行っているようであった。

この最初の滞在以来、毎年のように Thanksgiving Holidays になると訪問して滞在していたが、彼らのような温かい家族と一緒にいること自体が一人でアメリカ暮らしをしていたときの私の心のよりどころでもあった。暖炉の傍でいろいろなことを Mona や Lew と話した。また、トランプ、ビリヤード、ゲーム等、Gwen や Sherry によく遊んでもらった。彼女達は、実際、私の「生きた英語」の先生でもあった。

ホストファミリーは、私を別に特別扱いもしなかったし、私が滞在する時に与えられた部屋も長女 Gwen の部屋であった。それは、私がアメリカを離れるときまでいつ訪れても同じであった。

食事は、究めて質素である。朝は、ケログ等々のセリアル、オレンジジュース、卵、そしてハムまたはソーセージが付き、簡単なサラダも時々食卓にだされた。昼は、ヌードル・スープかハンバーガー。夜は、チキンやポーク或いはビーフの肉の料理、マッシュド・ポテト、グレービー、そしてサラ

ダとティーかミルクかジュースといった具合。でも、それで十分なのである。

ご主人の Lew と、トラクターに乗ったり、コーンやソイ・ビーンズを市場へ運んだりして、彼の農業の仕事に邪魔するのが好きであった。

また、Lew の実家が近くにあり、感謝祭の日には、全員がそこに集まり、インディアナ州の農家の大家族と一緒に楽しくときを過ごした。

ホストファミリーの家は、Kalamazoo から長距離バスで約 3 時間の場所にあるので、その後、毎年のように Thanksgiving Holidays のときに訪れたり、夏になるとレンタカーで Kalamazoo からドライブして立ち寄りしたりした。

ホストファミリーが家族全員で、ある夏の日には私を Western Michigan University に訪れてくれたことがある。そのときに皆で一緒に「Lake Michigan」へ泳ぎに行ったが、本当に嬉しかった。

また、Maine で過ごした「夏期講座」の後、Lobsters をお土産に立寄りしたりした。

ホストファミリーとは、今でも交信している。Gwen は既に結婚して子供も二人いるが、Sherry はどういう訳かまだ独身。

7. アメリカン・フットボール

Western Michigan University では、カレッジ・スポーツ、特にアメリカン・フットボールの観戦を大いに楽しむことができた。

WMU のキャンパスがあるミシガン州には、Big Ten Conference に属する The University of Michigan の他に Michigan State University がある。また、隣接するインディアナ州の South Bend (Kalamazoo からバスで約 3 時間) には、フットボールの名門 University of Notre Dame のキャンパスがある、という「環境」において、近隣の町に住む多くのアメフト・ファンがこれら3つの大学のアメフト試合を観に行ってしまうために、通常、Waldo Stadium の観客の数は、あまり多くない。

また、Mid-American Conference (MAC) というマイナーな Conference に所属しているということもあって、NCAA の Division-I に属しているにも係らず、地元の Kalamazoo やミシガン州西南部を除き、全米レベルのマスコミには、強豪大学に勝利したとき以外は、WMU が余り取り上げられない。そして、BCS クラスに属するメジャーな大学の一枚でもないのに、日本の「カレッジ・フットボール」ファンの間でもあまり知られていない。

しかし、WMU をはじめとする MAC の各大学のフットボールチームは、かなりの実力がある。その証拠には、MAC の各大学を卒業した選手達が、NFL でプロフットボーラーとして数多く活躍している。

MAC での最大のライバルは、同じミシガン州内の Central Michigan University (Chippewas) であろう。Bowling Green University, Ball State University, Kent State University, Northern Illinois University, Eastern Michigan University, University of Toledo 等も印象に残っているが、当時 MAC のフットボールチームの中では、Miami University (Oxford, Ohio) が最も強いチームであった。

正規の学生になると、WMU の全てのスポーツゲームをフリーで観戦することができる「年間フリーパス」をもらえるので、勉強の合間の息抜きに、フットボールを始めとして、WMU の Varsity Teams によるスポーツをいろいろと観戦することができた。

私が WMU で undergraduate を過ごした 1978 年～1982 年の 4 年間、WMU は、MAC 以外のチームとの試合では、強豪チームとあまり試合を行っていなかった。

しかし、近年 University of Wisconsin at Madison, University of Michigan at Ann Arbor, University of Iowa, University of Illinois, Indiana University, Michigan State University 等の Big Ten Conference に属する強豪チームや、University of Connecticut (Big East)とも試合を行っていて、フットボールのレベルがかなり向上しており、また、上記の大学との試合結果から、現在の WMU のフットボールの実力を窺い知ることができる。

因みに、2011 年に行われた University of Illinois との試合は、僅差で敗れてしまったが同年に行われた University of Connecticut には勝利しているし、また、過去に行われた University of Wisconsin 及び University of Iowa との試合にも、WMU が勝利している。

フットボールのレベルが向上してきたことは、WMU の Alumni としては、嬉しい限りである。もっとも、ミシガン州の州内では、WMU は、以前からそれなりに評価されている大学である。

2010 年、University of Notre Dame (UND)との待望の試合が行われた。試合の結果は、残念ながら WMU が負けてしまったが、攻撃は、UND とほぼ対等であった。

8. アイスホッケー

米国に来て最も興味を覚えたインターカレッジ・スポーツは、アイスホッケーであった。

カラマズーには、プロのデトロイト・レッドウィングスのマイナー・リーグであるカラマズー・ウィングスがあり、アイスアリーナが街外れにあり夜間にもかかわらず自転車でよく観戦しに行った。大学のアイスホッケーとはやはり迫力が違う。

学期が始まると、Western Michigan Univ.のアイスホッケーの試合を観戦して行く。それは、同期入学した仲間の中にカナダからの留学生で、アイスホッケーの選手が二人いたからでもある。彼らのうちの一人は、NHL の N. Y. Rangers にドラフトされ、もう一人は、Business が Major で、無事 4 年間で卒業していった。

Western Michigan Univ.では、対戦したその年に NCAA の全米チャンピオンになった Univ. of Wisconsin (Madison)や、クリスマス休暇で対戦したその年に NCAA の全米チャンピオンになった Harvard College のアイスホッケーチーム、等と金曜日及び土曜日に試合をそれぞれ行っていたので週末に二度見ることができた。Western Michigan Univ.は、どちらも大学との対戦試合も一試合は、必ず勝った。その当時から、現在のように強くなった Broncos のアイスホッケーの基礎が築かれていったのである。

9. バスケットボール

バスケットボールは、Western Michigan Univ.で Mid-American Conference の試合を student

pass を利用してフリーで見られるようになってから興味を覚えたものである。試合は、水曜日と土曜日に行われ、かつて NCAA の地区予選へ進出した経験がある Western Michigan Univ. (Broncos) の試合は、いつも満席であった。その黄金時代のヘッド・コーチが、現(当時)オハイオ州立大学ヘッド・コーチであることをアメリカ人の友人から教わる。Western Michigan Univ. では、寮のカフェで、バスケットボールの選手でガードを担当していた人と親しくなった。彼は、将来、学校の先生になるといつていた。

女子のバスケットも観戦していて面白かった。米国では、女子のバスケットは、極端に人気がなく観戦者もまばらなので、よく見ていた。印象に残っているのは、Northwestern Univ. との試合である。スクール・カラーがパープルの Northwestern Univ. は、中西部では、有数な私立大学であり、学生の質は、かなり高い。そして、裕福な家の子女が多く学んでいるところである。私の興味は、特にガードを担当しているプレイヤーを見ることであった。彼女は、非常に理知的なプレイをするレディーであった。

Broncos の試合で最も興奮したのは、Ohio University, Univ. of Toledo, Ball State Univ., Central Michigan Univ., Eastern Michigan Univ., Northern Illinois Univ. 等で構成された Mid-American Conference の試合である。特に点数が接近していたり、大敗していた試合を試合終了のブザーの直前のシュートで逆転したときの興奮は、言葉では言えない程である。

私は、バスケットボールとは、単調なスポーツであり、自らがプレイするだけのものと思っていたが、Western Michigan Univ. では、4 年間バスケット観戦を楽しみ、とうとうバスケットボールのファンになってしまった。

10. カラマズー・センターでの名画鑑賞

Western Michigan Univ. での学生生活が始まってから、アイスホッケーの試合がない毎週金曜日の夜は、downtown の Kalamazoo Center (カラマズー・センター) 内になる映画館で名画の鑑賞をするようになった。この映画館は、御当地アメリカの名画(最新作)をはじめ、諸外国の話題になっている名画を見せてくれるところであった。毎週のように見に行っていたので、どの映画がよかったかと聞かれても今は記憶に余り残っていない。しかし、この名画鑑賞のできる映画館は、確実に私の英語力を飛躍的に延ばしてくれた。

また、WMU のキャンパスでも映画が上映されていたが、Kalamazoo College では名画が頻繁に上映されていたので、よく K-College のキャンパスまで出掛けて行った。

後記

米国人の友人達と会話していると彼らも大学院時代よりも、大学学部時代のときの思い出を多く話す。私も例外ではない。大学院では、専門科目に集中するため、いろいろな意味で変化が少なかったように思う。それと比較すると、学部では、本当に多くの異なる科目を履修したり、いろいろなイベント等にも参加したりして、楽しい思い出が多い。私は、Western Michigan University で学部時代を 4 年間過ごせたことを幸いに思っている。

II. ⑥思い出という宝物

伊藤伸一（イトウシンイチ）

1980年6月～1982年9月

itos@gastec.co.jp

私がカラマズーに滞在したのは80年6月から2年間でした。今でも覚えています。当時のライブラリー裏の丘に、たんぼぼがたくさん咲いていました。その時のWMU西キャンパスが印象的でした。そして今でも当時流行っていた80'sのロック・ポップを聞くとたまらなく、あのけだるい空間で満ち溢れていた Begelow Hall を思い出します。

当時、私はKVCCの学生でした。しかし、そのほとんどはWMUのドーム（寮）で生活を送っていました。理由はまかない付き、そして手取り早くアメリカ人のガールフレンドそして友達を作れるのが目的でした。しかし金はなく、毎週キャンパス内のどこかでバイトをしていました。WMUは当時、パーティー・スクールとしても有名でした。金曜となれば夜な夜なビールを買って、愛車（トランザム）でEastキャンパス裏の学生アパートや Knowlwood アパートに出かけました。特にあの Knowlwood Park で開催される夏のパーティーは凄かったですね。最初の内は見知らぬ連中が群がっている中へ出かけるのは流石に勇気がいりました。慣れてくると一人で行くことも面白かったですね。おかげでよく喧嘩もしました。しかし念願の金髪のガールフレンド（失礼！）もできました。私は当時、曾我先生と自然と距離を置いていました。それでも曾我先生にはKVCC卒業後に自宅に招いていただきました。またWMUの寮規約を破ったがために追放寸前になりました。それを助けていただいたのも曾我先生です。（先生ありがとうございました。そして、すみませんでした）。その後、私はMSUへトランスファーしました。

カラマズーでの思い出は沢山あり過ぎて正直、困りますね。KVCCのInternational Student課のDr.ダウディーも懐かしいですね。オリエンテーション前に初めて会ったダウディーは印象的でした。私が各務原市出身だと言ったら、昔、軍人だった頃、“カカミガハラ”の岐阜基地にいた”と言うのです。そして、“まだあの辺りに赤線はあるのか？何とかという女性を知っているか？”などの質問。。。。。ルイ・アームストロングばりのあの声と風貌で圧倒され、私は英語もまだろくに喋れないのにそんな話をされたため、とっさに“赤線なんてあるわけない！そんな女、知っている訳ないだろうと！”カタコトでも冷たく言ってしまいました。豪快に笑っていたダウディー、今でも元気なのだろうか。いつでも遊びに来いと暖かい笑顔で言ってくれたのに、いつも遊びほうけてしまい、そして困った時にしか会わなかったダウディさん懐かしいです。本当はもっと第2の故郷のことを話したかったのかも知れない。

車で毎週のように行ったスタンアンドアリエスというディスコも懐かしいですね。ある晩、日本人とアメリカ人で飲みに行った時のことです。そこで演奏中だったライブバンドのボーカル女性が、いきなり“客席に日本人はいないか”とコールされ、それで、“ここにいるぞっ”と手を上げたら、舞台が上がって来いと言う。指示の通り、いそいそと舞台に上がりました。そして他の客もいる前で、小坂明子の「あなた」を歌い始めるではありませんか。ボーカルの女性が「あなた」を昔、日本に営業で行った時、よく歌っていたと言うのです。しかし、歌詞を忘れてしまったというのが理由でした。他の仲間の日本人も全員ステージに上がらせられました。夢中で「あなた」を歌ったのを覚えています。今も、カラオケで当時を思い出して歌う時があります。当時、唯一、仲間だった日本人も懐かしい。

それに初めて寮以外に住んだエルムストリートのアパートも懐かしいですね。KVCC 最後の冬でした。後で知ったのですが、何やらあの近くに昔、永井荷風が住んでいたとか。あのアパートも格別の懐かしさがありますね。文章では書けませんが。

仕事上、海外によく出かけます。アメリカへは学会や展示会が春と秋に開催されるため、年に2-3回は出かけます。3年前の6月、シカゴに仕事で訪れた時、いきなり思いついて土日を利用して、一度だけカラマズーに行きました。ダウンタウンのホテルに泊まりました。昔はヒルトンホテルでした。そこにもディスコがあって週末よく行ったことを覚えています。今はラディソンホテルに変わっていました。学生時代はヒルトンホテルなど高値の花だったのにと笑いながら苦笑したのを覚えています。。。そしてホテルから WMU まで歩きました。当時はいつも車だったので何やら不思議な感だった。変っている風景とそうでない風景が頭の中で交差しました。WMU スロープに入る前の曲がり角にあったモーテルがなくなっていたこと、よく車がお壊れ、修理代をばったくられた自動車修理工もなくなっていたし、その横にあったレコードショップもなくなっていた。あそこで購入したロバート・プラントのコンサートチケットなど思い出しました。踏み切りを超えて、スロープ前を右側に折れるとエルムストリートです。

カラマズー時代は私には非常にワイルドでした。それが青春と言うものなのでしょうね。それを思い出す時、私の記憶はあの時の学生時代にタイムスリップします。あの経験があったからこそ、今の自分があるのだと思います。あの頃は目を覆うような失敗もあったし、拳銃を押し付けられたこともあった。しかし今思うと毎日がキラキラしていました。思いきって遊び、思い切って勉強に集中した。あの刺激が毎日が今の自分を形成しているのではないかと思います（よい事か、悪いことか分かりませんが）。これは私の宝物ですね。そんな事を想いながら、私は6月、学生がほとんどいなくなった静かな WMU のあのだらだら坂を登りました。それほど暑くもないのに汗が頬をつたっていました。

II.⑦ Kalamazoo was such an eye-opener.

Thank you, Kazoo!

白井美帆

1988年4月～1989年4月、1990年4月～1991年6月

mihoshirai@hotmail.com

今から24年前、初めての海外生活にドキドキわくわくして飛行機に乗ったことを今でもよく覚えています。到着したカラマズー空港はとても小さな空港で、なおさら異文化圏で生活することになることを強く印象付けてくれました。初めての寮生活では、特に Spring/Summer terms というのもあり、アメリカ人学生より留学生の方が多く、アメリカ人ルームメイト以外にも、他国の学生とも親しくなれる機会にもなりました。

それまでは、似た環境の学生が通う中学、高校、短大と進み狭い範囲での仲間意識にとらわれていましたが、カラマズーでは全く異なる文化背景や考えをもつ学生と関わることにより、私の意識も大きく変わりました。アメリカ式の膨大な予習量をこなしながらの勉強も、やりがいのあるものでしたが、それより何よりルームメイト、クラスメイト、大学に紹介していただいた週末ホストファミリー、アジア・中近東・アフリカからの留学生とも接し、国際色豊かな環境を肌で感じる事ができたことに一番感謝しています。

また、WMU 留学中に学んだことのひとつに、アメリカでは学生でも自分の責任と権限を各自で主張しなくてはならないことでした。日本では(特に近年は)、大学は学生を中高生のように扱い、至れり尽せりですが、大きな目でみれば学生は社会に出る前の下準備として、自分で考え、必要な道は切り開いていくことが本人の為になると思えます。当時、とても貴重で価値ある体験ができたことは、その後の私の人生に大きく影響しており、現代の大学生にもどんどん海外へ出て、視野を広げる機会があることを願っています。

WMU 卒業後、外資系企業に就職したことも、その後に再度アメリカの大学院で勉強したことも、全ては Kalamazoo から道が開かれました。このような素晴らしい機会を与えてくれた立教女学院短大の留学制度、WMU でお世話になった曾我先生や教授陣、留学中に食料や雑誌などを送ってくれた家族や祖母、沢山の手紙をくれた友人達に感謝しています。

II.⑧ Sarah との思い出

田中美恵 (旧姓 千谷)

1988年から1989年

i@iseyoshi.com

カラマズーへのプロペラ機を前にした時、「えっこれに乗るの?」と思った。カラマズー空港に着いた時、「なんでこんなところへ望んで来ちゃったのかなあ」と思った。カラマズーへの第一印象はこんな感じだ。夏休みの寮に着いて一休み。寒い土地柄クーラーもなく暑さでうだるようだった。マイナス何度かになるので、鼻の中が凍るよ、なんて言われてきたのに、この暑さは何?寮で小さな扇風機を貸してくれたことが命拾いだった。最初のオリエンテーションで会った留学生や、他の学校からきた日本人とも仲良くなり、とりあえずは楽しく始まったウェスタン生活。秋のセメスターが始まり、ルームメイトとも気が合いそう。そこからは全速力で毎日が過ぎた。

その二年前に過ごしたテキサスとは気候も人種も全く違って、外でサンサンと太陽を浴びることも少なく、寒い時期が長いのでビルとビルを最短距離で渡って、まずは寮に帰ってくる。気候のせいか同じアメリカ人でもテキサスの人と比べると内向的で保守的な人が多いように思われた。でもその気質のお陰で私のような外国人でも根気強く話を聴いてくれることが多く、友達も作り易いと感じた。とりわけ私のいた寮は **Davis** という年齢の高い学生限定の寮だったので、パーティアニマルの若者や寮内のいざこざもなく、居心地はとても良かった。

最初に出会った外国人留学生や日本人仲間とも仲良くしつつ、私はルームメイトの **Sarah** と次第に心を深く分かち合うようになった。お互い勉強の途中で一息つくと、色々なことについて話始めた。家族の話、友達の話、もちろんガールズトークに欠かせない男性について、将来の夢や自分の価値観、時には死刑はあるべきかどうか、など話題は尽きなかった。**Sarah** とは毎日の夕飯や金曜の夜のバーもそしてクリスマス休暇や数日の休みも一緒にいた。休みの時には彼女の実家にお邪魔し、彼女の姉妹と4人で運転してフロリダまで旅行したこともあった。しょっちゅう風邪をひいて熱を出した私を、試験前であるにも関わらず、**Sarah** はよく看病してくれた。熱を下げるために水のシャワーに放りこまれて、震えながらも熱が下がって気持ち良く寝られた晩のことは今でも忘れない。私が勉強していると「**Mie** はいつも勉強していて自分が怠け者にみえる。そんなに勉強するな!」と怒られて、母国語である彼女とは、ハンディがあることを説明することもできないほど、理不尽な気持ちだったことも後には良い思い出だ。今でも仕事に熱中し過ぎる時は、**Sarah**

の言葉を思い出して歯止めをかける時がある。

その Sarah が4年前に結婚した。結婚式の招待状を片手に、2月の雪の深い時期、彼女のお父さんが空港まで車で迎えてくれて運転すること約2時間、彼女や家族との再会は感動的だった。一緒にフロリダに行ったお姉さんは身体も貫禄がついて、子供が5人くらいで、上の子は20歳近く、その頃つき合っていた彼も良いお父さんになっていた。下の妹もその後イギリス留学し弁護士の勉強をして一児の母になっていた。6人兄弟で最後の結婚となった彼女は、夜な夜な話した好みの男性を貫いた相手を選んだようだった。

3. 11の後に心配してメールをくれた頃、Sarahのお母さんは体調を壊していたが、その後良くなったという連絡をもらって安心し、そのままご無沙汰状態だ。日々の忙しさに甘えてカラマズー時代に頂いた様々な恩恵を、すっかりなおざりにしている自分を、ただ戒めるだけではいけない、と感じている。そんな気持ちもあって今日は拙い文章を書いてみた。



II. ⑨ カラマズーから始まったこと

Things originated in Kalamazoo,
personally speaking



阿部 仁

(1996/6-2005/11)

jin.abe@r.hit-u.ac.jp

家庭と仕事と趣味、この三つがバランスする時など人生においてそうそう多くあるわけではないが、一時的であれ今これらが中庸状態にあることに感謝している。そして、この三つともがカラマズーに深いルーツを持っているのだから、本当にカラマズーに足を向けて寝られない。

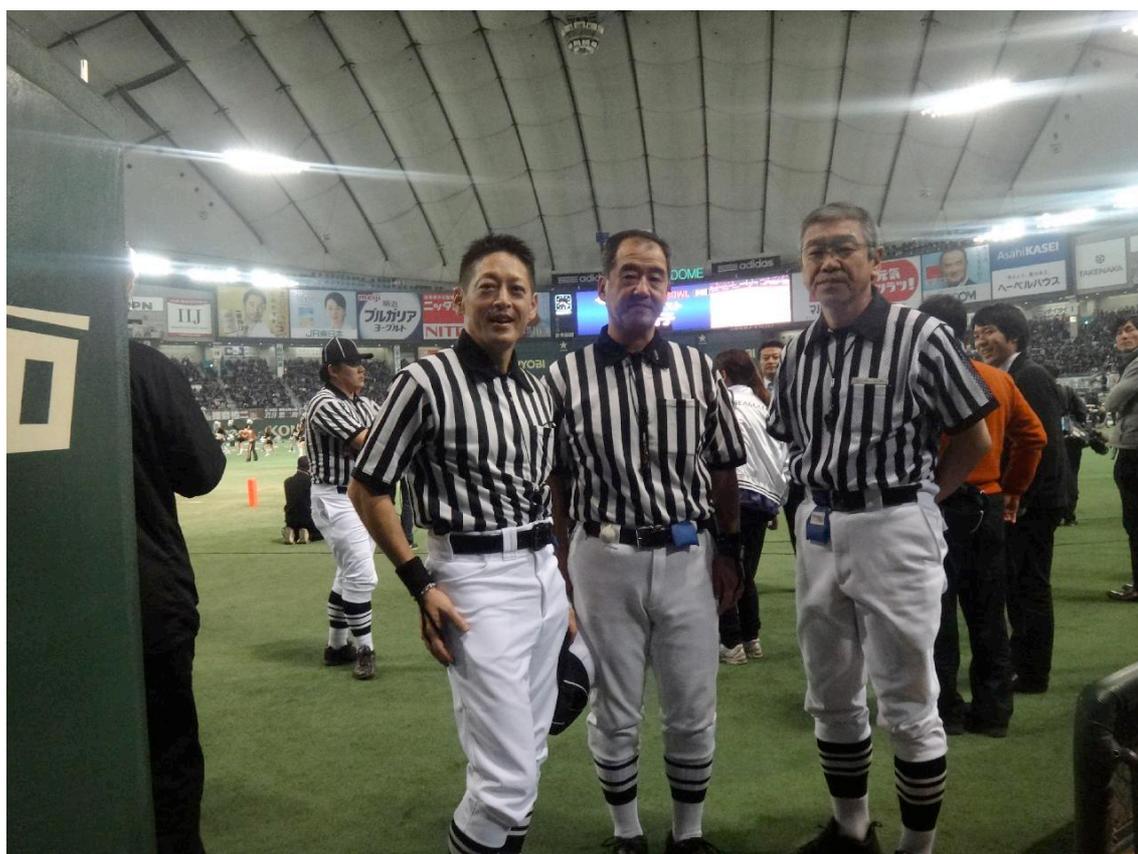
家の中では、留学中にカラマズーで生まれた二人娘が中2と小6に成長した。幸い、反抗期に突入する少し前なのだろうか、今でも両親と他愛もない話ができる間柄にある。一方キャリアに目を向ければ、営業から転身を決意し WMU で教育学を学んだ後 WMU 国際交流センターに就職し、そのおかげもあってか、今は日本の大学で教員として国際教育に携わる毎日を過ごす。

ライフワークになりつつあるアメフトの審判もカラマズーがきっかけなのだ。もともと、アメフトは高校時代から見ると見るのもするの好きだったが、防具をつけてフィールドに立つ機会には恵まれなかった。それが心残りになっていたのだろうか、2000年の夏にカラマズーの姉妹都市である沼津市使節団をWMUで歓迎するという共同プロジェクトが立ち上がった時、カラマズー側のホスト役を務めていた Bob Hall 氏と知り合いになり、彼が高校のアメフト審判を楽しんでいるという話は僕の好奇心に火をつけた。

どうやったら審判になれるのか？と尋ねたところ、やりたい人は登録して審判クルーに加えてもらえばいいのさ、と彼は言った。続けて、WMUには現役のNFL（プロリーグ）の主審が体育の授業でアメフト審判の概論を授業で提供しているからそのクラスを履修するのはどうだい？と勧めてくれた。NFLの審判は、全米で、いや全世界で17人しかいない、レア中のレアなプロフェッショナルである。その一人がなんとWMUの教授で、しかも審判についての講義をしてくれるという。早速授業を履修し、そこからミシガン高校スポーツ連盟の審判として5年間笛をふいた。

2005年に日本へ帰国することになり、この趣味も終わりだなと思っていたが大きな間違いだった。日本のアメリカン・フットボールは1934年に初めて公式試合が開催されてから、80年

近い歴史を持っているのである。今では関東学生連盟を始め、関東の高校や米軍基地の高校の試合があるおかげで年間 50 試合近く審判をさせてもらっている。日本を代表するチームに選ばれる選手と同じフィールドで、こよなく愛するスポーツの振興、普及に携われるのはこの上なく光栄なことだ。沼津市とカラマズー市が姉妹都市でなければ、姉妹都市プロジェクトで Bob Hall 氏に出会えていなければ、そして NFL の主審である Ron Winter 氏が体育学の教授でなければ、この世界には足を踏み入れていなかったかもしれない。カラマズーを起点とする出会いに感謝したい。



東京ドームでの社会人日本一決定戦, Japan X Bowl にて (2012.12.17).

2001年にカラマズーで始めた高校アメフト審判がここまで続くとは、当時は夢にも思いませんでした。

III:WMU 百周年旅行 (2003 年)

Ⅲ. WMU100 年祭

上谷達也
2003 年 10 月実施

社会人になり、活動していたときに、WMU に参加した人で、アルミナムを作ろうとのこと
から、機会を見て、集まる機会が増えてきた。WMU 慶応会やカラマズー会が何らかの形で、
カラマズーや WMU を訪問したり、学んだりした人たちのサロンの会である。WMU 学
校関係者が来日すれば、集まって歓談をする。WMU 学生が、色々な形で来日するときには、
歓迎会を開いたり、ホームステイをアレンジしたり、少しずつ恩返しができてきたと思わ
れる。

そのような中、2003 年に WMU100 年祭が開催されるということで、一種のセンチメンタ
ルジャーニーではないが、有志を集め、訪問しようということになった。ツアーの責任者
として、その準備やら、旅程やら、色々とお世話をするということになったことから、青春の思
い出を自ら醸し出すことになった。これらのすべてを記載することはできないが、ツアー
の旅程を添付する。

また旅行に参加した人は、全員で 23 名ということになった。さらに現地で合流し
た人たちもおり、大変賑わう旅となり、一同まさにセンチメンタルジャーニーを
楽しんだ。

Western Michigan University

CENTE-mental Journey 日程

日 数	月日 (曜)	発着 都市名	発着 時間	交通 機関	摘要
1	10/8(水)	成田発 シカゴ着 シカゴ発 KZOO 着	11:30 14:10 11:45 13:55 15:40	UA884 UA5846 専用バス	成田空港集合 到着後専用バスでラディソンプラザ ホテルへ (10/8-10/11 まで 4 泊)

			19:00	夕食会	日本人留学生を招いた夕食会 The Union Cabaret & Grill (ホテルより徒歩 2 分)
2	10/9(木)	KZOO 滞在	08:30 09:00 09:30	専用バス (途中に バス移動 を含む)	専用バスにて WMU 訪問： <Ellsworth Hall B-200> 国際部，留学生センター訪問 キャンパス・ツアー (Library - Fine Arts - Parkview Campus - Sparau Tower - HCOB)
			12:00-		カフェテリアで昼食(Bigelow Café)
			13:00		学会(WMU)または WMU 授業参観 (分科会形式、好きな方に参加)
			16:00- 17:00	レセプシ ョン	学会終了後のレセプション(WMU)
			17:00	専用バス	ホテル帰着
			18:00	Reception	Bailey 学長参加予定 *1
			19:00	夕食会 (立食形 式)	教授、WMU 国際部，留学生センター 現・旧職員などお世話になった方々を ご招待します。(宿泊ホテルにて)
3	10/10(金)	KZOO 滞在	08:30 — 12:00	専用バス	専用バスにて終日近郊ツアー： バトルクリークのケログ社シリアル 美術館、WMU 航空学科 (ボーイン グ 737 等)、 バトルクリークにて、 Japan Association of SW Michigan との昼食 会 (JASWM とは Battle Creek の日 本企業とミシガンとの貿易振興団体)

					<p>Cross Road Mall で WMU グッズのお買い物, Kalamazoo Valley Museum を見学訪問</p> <p>ホテル着</p> <p>17:00 専用バス 国際部主催の前夜祭 Dinner に招待されます (ホテル近辺)。</p> <p>18:30 夕食会 場所: Rally at Epic Bistro (ホテルより徒歩 5 分)</p>
4	10/11(土)	KZOO 滞在	<p>11:30 専用バス</p> <p>12:00-</p> <p>13:45</p> <p>14:00- 17:00</p> <p>17:00</p> <p>18:30</p>	<p>11:30 までは自由行動</p> <p>専用バスにて WMU スタジアムへ移動:</p> <p>WMU 会 Tailgate Party (スタジアム Party 会場にて)</p> <p>パレード参列(Parade of Nations)</p> <p>フットボール観戦(WMU Football Game vs. Bowling Green)</p> <p>ホテル帰着</p> <p>希望者は、Howard 邸へシャトルで訪問</p> <p>Reception (国際部部长 Dooley 邸) へ招待されています。</p> <p>(100 周年メイン・イベントはこの日に集中しています。)</p>	
5	10/12(日)	KZOO 発 シカゴ着	<p>5:30</p> <p>7:25 7:15</p>	<p>専用バス</p> <p>UA5847</p> <p>ホテル出発 専用バスで空港へ</p> <p>シカゴでの待ち時間が長くなっております。UA の都合で、時刻変更あり。</p>	

		シカゴ発	12:50	UA883	
6	10/13(月)	成田着	16:05		空港にて流れ解散

* 1 President Bailey には、6時のレセプションへの参加要請中。ただし、6時にこられない場合、4時の学会レセプションにて Donation のアナウンスを行うこともありえます。

* 2 予定については、現地で多少変動することがありますので、ご了解お願い致します。



WMU 校舎



センチメンタルジャーニー御一行様



100年祭に合わせ開催されたフットボールゲームを見学



WMUで学んだり、訪問したりした時に大変お世話になった
望月牧師ご夫妻（右）、曾我名誉教授後夫妻（左）

～FIN～